
ゼロの掌編集

まし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの掌編集

【コード】

N3399R

【作者名】

まし

【あらすじ】

思いついた泡沫ネタを短編としてまとめたもののチャンポンです。時間つぶし程度に笑覧下さい。

クロス、転生素素あり。

はじめに

皆様の小説を読み自分でも書いてみたいと思い構想をしたのですが
上手く続けることが出来ず断念していました。

しかし、ある日ネタを短編としてまとめるくらいなら出来そうだと
思い、

幾分かはましなものを「ゼロの掌編」として短編投稿しました。

当初は三発で打ち止め予定だったのですが思ったより増えたので

今回、一纏めにしました。

お目汚しではありますが失礼いたします。

短編の方は数日中に削除するつもりです。

お読みいただいた皆様にはお礼申し上げます。

3 / 6 短編削除しました。

ご覧頂きありがとうございました。

アルヴィースの食堂の惨劇

「君の軽率な行いで二人のレディの名誉に傷が付いてしまった。

この責任をどう取る積もりかね」

僕は醜態を取り繕って寝言を言う男の言葉を無視して近づくと

その両肩を掴み彼の目を直視し真剣な声で語りかける。

「ギーシュと言ったな？」

いいからすぐにあのモンモランシーという女の子に謝れ。

今の僕にしてやれることは何もない。いそげ今ならまだ間に合う」

3

僕は目の前の男の命を救うために必死の説得を試みる。

「何を言っているんだね君は？」

僕は君の貴族に対する非礼を咎めているんだ。

その汚い手を離して即刻謝罪したまえ」

しかし、返ってきた返事は現状を弁えないものだった。

そして時間を浪費するうちに『ソレ』は現れた。
もはや手遅れだ。

「ゲコ」

それはカエルの鳴き声だった。

ごく小さなアマガエル。

それが食堂に飛び込んできて鳴いた。

そしてそれだけでその場の温度が氷点に達した。

「い、一体何が……」

突然の重圧に慄きの声を上げるギーシュ。

そんなギーシュを僕はブルブル震えながら見つめている。

「お、お前殺されちまつ……」

アルヴィースの食堂の惨劇（後書き）

『動物のおしゃべり』より

「美伽ちゃんのお兄ちゃん」（名前未設定。ウィンタールヴと

アマガエルの「翁」（最強キャラ。ルーンでさらに強化）が

召喚された掌編でした。

使い魔のおしゃべり

「ゲココ〜！(この粗忽者が〜！)」

「きゅいいいっつっつ！?!?!?」

トリスティン学院に風韻竜の絶叫がこだまする。

「おや断末魔だ」

「カアカア(またイルクウが翁おきなに折檻されてんだろ)」

「しゃしゃー(もう少し学習すれば良いのに)」

学院の広場の一角でその声を聞きつけたのは人間とカラスとヘビ。

それぞれ学院の生徒に召喚された使い魔だ。

「……………聞かなかつた事にしよう」

「カアカ(そうだな)」

「しゃ〜〜(翁おきなが怒ったときは遠くに用事を思いつくに限るわ)」

3人(?)は声のした方とは反対側に移動し始めた。

彼らが何故このような行動をとるのか？

それは3日前の事だった。

授業中に人間を呼び出した生徒の呪文が失敗して爆発。

ショックを受けた使い魔たちが大混乱に陥った。

その混乱の中でヘビがあわやカラスを飲み込もうとしてしまった。

それを電光石火の動きでヘビを叩き伏せカラスを救ったのが

おきな
翁・モンモランシーの使い魔のアマガエルなのだ。

さらに戸惑う他の使い魔を落着かせ、混乱の収束に寄与した。

この時人間 「あらゆる獣を操る神の右手ヴィンダールヴ」は

爆発に吹き飛ばされ頭部を強打して気絶していた。

意識を取り戻したのは魔法で教室を吹き飛ばした生徒が

教師に命じられた教室の片づけを終えてからだ。

片付の役に立たなかったと昼食は抜き。食堂で賄いを恵んでもらっ

た。

最近お世話になりっぱなしなので手伝いでもしよつかと考えている。

「しゃー……（何で私がカエルごときに……）」

その事を思い出して黄昏れるへび。

「そつ気を落とすなって。」

世の中には不条理なことはいくらでもあるぞ」

そういつてへびの肩を叩いて慰める人間。

「しゃーしゃー（そう言われてもねえ。」

これまで餌にしていたカエルに叩き伏せられたなんていい恥よ」

人間の慰めもへびには効果が無いようだ。

「いや、爺おきなはルーンおまなの力抜きで

タロー　秋田犬に勝てるからへびじゃ無理だよ」

「カアカア（犬に勝てるアマガエルってなんだよ）」

言葉を重ねる人間に口を挟んだのはカラス。

「昔の両国の川開きの花火を知ってるって言ってたね。」

享保18（西暦1733）年に始まったから250年以上前かな」

「「しゃー、カアアー」（それはアマガエルじゃないよ）」「

同時にツツコムヘビとカラス。

「うん。僕もカエルっぽい何かと思っている」

「貴方たち本人がいないと思って好き勝手言ってるわね？」

そこに翁おきなの主ぬしモンモランシーが立ちはだかる。

「あれ？モンモンだっけ？君、使い魔の言葉解ったっけ？」

「私は解らないわ。でもロビンおびん（＝翁おきな）は解るのよ。」

そして使い魔まじは主ぬしと感覚共有できる。意味は解るわね？」

「……筒抜けですか。そうですか」

「命があったらまた会いましょう。それからモンモン言っな」

絶望に身を振る使い魔達に言い放つとモンモランシーは去ってゆく。

その日、三人の生徒が使い魔の怪我の治療に秘薬を使う事となった。

そしてモンモランシーは少し懐が潤った。

使い魔のおしゃべり（後書き）

ヤンキ
青年カラスと4巻80P登場のへびさんも召喚された掌編でした。

ぼりつつ焼肉味

「ああヴェルダンテ！ 君はいつ見ても可愛いね！！」

ギーシュが使い魔のモグラを抱いて萌ふ萌ふしている。

ヴェルダンテも 「モグモグモグ」 と嬉しそうに鼻をひくつかせている。

「ギーシュ駄目よ。空のアルビオンに行くのに、

地面を掘って進むモグラは連れていけないわ」

ルイズが呆れて溜息を吐いている。

「……………」

そして僕は - 蒼白な顔で体を硬直させている。

目の前の光景は少年と愛嬌あるモグラのじゃれ合い。

ちよつと生暖かく微笑ましい光景に見える - 普通なら。

だけど使い魔ヴァインダールヴになってから動物とおしゃべりできる僕には…………

『ヴェルダンテ 朴訥な好青年の胸に頬ずりするキンシュ金髪美少年』 に見えるんです。

僕はキング・オブ・フラレの称号を頂く業の持ち主ですが

そついう方に走ろうとは思わない。本当にありがたくありません。

始祖ブリミル。あんたを恨む。

もう止めて！！

勧められて読んだ三国志小説でも周瑜×孔明までが限界だったんだよ！？。

悪いけどヴェルダンは留守番だね。

毎日あの光景を見せられたら心が保たない。

気を取り直すと僕が落ち込んでいる間に一人増えていた。

地面に倒れたルイズが立ち上がるのに手を貸している髭のハンサムだ。

何でルイズが倒れてるの？それにヴェルダンはどうした？

見回すとルイズから離れたところでヴェルダンがひっくり返っている。

ギーシュは新たに現れた髭のハンサムに抗議している。

近づいて事情を聞くとヴェルダンのいたずららしい。

ルイズの持つ宝石に興味を持って彼女を押し潰してしまったとのこと

と。

ウチの犬
タロー（秋田犬・雄）もマリリン同級生の飼い犬（グレート・ピレニーズ・雌。肥満気味）に

敷き潰されたり弾き飛ばされたりしてたなあ。

「ねえアンタ今、私のこと犬に例えなかった？」不機嫌そうなるルイズ。

「滅相もない」最近動物と人間の区別が無くなってきたかな。

グリフォンを従えた髭のハンサム -

ワルド子爵は姫さんの派遣した腕利きの護衛だそうだ。

「おいでルイズ」ワルド子爵はグリフォンにひらりと跨がるとルイズを手招きした。

僕はできるだけ俯いて -

『手網装着の剽悍な青年グリフォンに跨がるワルド子爵』の方を見ないよう
にして

- 「その必要はありません」と告げる。

「どついう事かね使い魔君？」不審げにワルド子爵が問いかけてくる。

僕は空に向かって口笛を吹くと答える。

「風竜をお願いしてアルビオンまで連れて行って貰えます。」

4人来てくれるのでワルド子爵もどうぞ。

人が乗ってなければグリフォンも付いて来れますよ。」

「え……。そ、それは何とも……。頼もしい事だね……。」

何かワルド子爵の顔色が悪いがどうしたんだろう？

僕がワルド子爵を気遣っていると風竜達が到着した。

「グルルルウ（もう用意はいいのか？）」

一人が代表して確認してくる。

「はい。ただ一人増えたので交代の人は無しです。」

それとグリフォンが付いてくるのでお手柔らかに飛んで下さい。」

「グウオン。グウウウ！（了解した。それでは行くぞ乗れ！）」

アルビオンまでの空の旅は途中一隻の船とすれ違った以外、

特に何の問題も無く王党派の拠点ニューカッスルまで辿り着いた。

「ご苦労様」 「ルイズ。労いは彼ら風竜達にしてよ。」

無事到着して遣り取りする僕とルイズを見ながら

ワルド子爵は頂垂れ、ますます顔を青くしている。

「ルイズ。ワルド子爵の調子が悪そうだ。彼は先に休ませてもらおう」

本当に辛そうだ。大丈夫なんだろうか……。

「ここで待ち伏せしてりゃグリフォンと馬2匹が通るから

馬の方を襲えって話しだったんだが……」

「全然こねえぞ。もう半日たつぜ」

ワルドの偏在
仮面の男に雇われた傭兵達が待ち疲れて愚痴る。

「ワルドの奴どうしたってんだい。」

襲撃を中止して直ぐにアルビオンに来いなんてさ」

不審を抱きつつも船を待つフーケ。

「王子。さっきの竜は何だったんでしょな？」

「さて。人が乗っていたが竜騎士にしては妙な一行だったな」

空賊に扮したウェールズ王子以下の王党派は首をひねる。

「まあいい。一度拠点に戻るぞ！」 「了解！」

途中、単独航行で硫黄を輸送していた貴族派の船を拿捕し

意気揚々と凱旋するイーグル号。

「どろしてこつなつた？」

途中の仕込みが全て無駄になったワルドは呆然と呟いた。

今日のワルドは少し星回りが悪いようだった。

ぼりっつ焼肉味 (後書き)

フルト お兄ちゃん
策士が天然に翻弄される掌編でした。

遠い夜明け

学院のメイドの一人シエスタが物好きにもルイズの使い魔に好意を抱いているのは、

傍からから見ても明らかで、学院の平民と一部の教師、生徒に知られている。

また、相手も満更ではなさそうなので、シエスタは積極的獲物を狩りにかかっに接近した。

しかし、シエスタの努力は今のところ完全に空回りをしている。

シエスタが手を繋ごうとすれば、「あれ何？」と指をさして、手に空を切らせる。

「ん、どうしたの？」

「な、何でもありません！」

(フジノ君。君は何て残念な奴なのかね……)

偶々通りがかったギーシュは泣きたくなっただけと言っ。

腕を組もつとすれば、急に方向転換されて、目標を見失い地面に倒れ臥す。

「だ、大丈夫かい？ 足元には気をつけないと」

「うっ、有難うございます……」

（流石お兄ちゃん。世界を越えても、まったくブレがないぜ）

使い魔仲間のカラスは感心あきれした。

抱きつこうとすれば、絶好の拍子に落とし物を拾うために膝を折って屈まれる。

シエスタは彼の背中に乗った状態になり、驚いたお兄ちゃんが起き上がった為、

抱きつこうとした勢いと、下から突き上げられる力が相まって、

見事な放物線を描き、背後の池へと飛び込んでいった。

「うきゃあああああっつっ!?!?」

「ああ、シエスタ!?!」

（女中殿。道のりは険しいの）

シエスタを水中から助けあげた翁おきなは溜息を吐いた。

そして、濡れて風邪を引いて寝込んだ為、相手が責任を感じて見舞いに来たところで、

意を決して正面から告白した。 - が、気付いてもらえなかった。

「私、好きです!!」

「僕も好きだよ」

「え？ えっ！ それって!？」

「君の村のワイン。酒精アルコールは初めてなんだけど、すごく美味しいね」

「ソーデスネ」

(駄目だわこの男、早く何とかしないと)

シエスタの同室のローラは全身を脱力感に苛まれた。

「ふふふ。流石は僕達のフジノ。期待通りだ」

「「乾杯!!!」」

そしてマリコルヌ達はキング・オブ・フラレで朴念仁な使い魔に祝杯を上げていた。

ただし、マリコルヌの歓喜は3日天下となる。

「あ、シエスタ。もう時間だから厨房に行かないと」

「え、ええ、わかりましたから、そんなに手を引つ張らなくても大丈夫です!？」

後日、あっさり手をつないでくるお兄ちゃんに慌てるシエスタの姿

があつた。

(手はつないでるけど……まるで妹みたいな扱いじゃないの)

自分の使い魔が天然である事をルイズは理解した。

遠い夜明け (後書き)

お兄ちゃんにはハーレムラッキースケベゼロ魔補正など存在しない掌編でした。

召喚の思い出と人事異動の顛末

「前非を悔いて心を入れ替えます。どうか命だけはお助け下さい」

いきなりだが、俺ことジュール・ド・モットは、

ただいま絶賛土下座中であります。

「『波濤』が平民を呼び出したぞ！」

「オマケにいきなり謝り始めた!？」

周りの同級生がなんか言ってるが俺の耳には入らない。

ここで目の前の存在から敵性認定されてしまったのは

俺の冒険は終わってしまうからだ。

ジュール・ド・モット。二つ名は「波濤」

未来のトリステイン王国の宮廷勅使にして

平民の可愛娘ちゃんを食らうエロ生物。

それが俺の転生後の名前だ。

俺は原作に忠実であることを心がけ

チート内政などはせず

10の歳を迎えてからは

自分好みの女の子を頂いて参りました。

俺の行動については

手ほどきをしてくれた父、

ツバメ狩りの母、

ともに理解が深く、

特に妨げられることはなかった。

でもカトレアの病気は治した。可愛いし。

15歳で魔法学院に入った後も

同級生、先輩、先生、使用人を問わず

手を出しまくっていました。

親の権力もあり、

魔法はスクウェアだった俺を止められたのは

オールドオスマンと

新任のコルベール先生ぐらいだった。

同志オスマンはあまり止めなかったが。

そして2年目、春の使い魔召喚の儀式。

俺の悪行はここまでのようだ。

呼び出した目の前の俺の使い魔

エミヤシロウ

正義の味方

を説得できねば

命も終了かもしれません……。

何で一介の水メイジの俺が英霊呼び出すの？

転生者だから？

そんなチートいりません（泣）

「……なんて事もあつたなあ」

「どうしたマスター？」

呟く俺に問いかけてくる、使い魔 兼 執事の衛宮士郎。

彼は今、侵入者を迎撃中だ。

「いやちよつとお前さん呼び出した時の事を思い出して」

「それは目の前にいる奴のせいかな？」

「うむ、『平賀才人』が何で『死徒』なの？死ぬの？何て思ったりね……」

「自業自得だな。」

あのメイド、シエスタといったか？

なぜあの娘を『無理矢理』学院から連れ出したのだ？」

「だって原作イベントだし」

アニメ版だけだな。

「……それで命を危険に晒してどうする」

呆れつつも迎撃に手は抜かない。

才人は死徒として接近戦能力が高そうなので

士郎は近づけないように宝具の連続投影、投擲で牽制したのだが……

才人は飛んでくる剣を空中で奪い取り後続の剣を叩き落してやがる。

「ランスロットかよ。才人の柄じゃないだろ」

死徒の肉体能力とガンダールヴのルーンが合わさると

4次バーサーカーモドキができるようだ。

「シエスタ返して謝るから、連れてくるまで時間を稼いでくれ」

「時間を稼ぐのはいいがアレは倒してしまっっては良くないんだな？」

「良くない。適当に遊んでやってくれ」

「了解した。」

……あと奥方にはメイドを連れ込んだことは露見しているぞ

奥に向かいかけた足が止まる。

「……カトレアにこの事がバレたのかね？」

「ルイズ嬢が義理の兄の凶行を姉に黙っている理由がないだろう。」

「これが終わったら私は遠くに急用を思いついたので出かけるからな」

主人を見捨てる使い魔の最終宣告に俺は呆然とする。

そして一言。

「地獄へ落ちろアーチャー」

後日、虚無の担い手と使い魔の会話

「いやあ、お前の姉ちゃん怖いのがな。」

執事^{士郎}さんはモット伯が制裁されてる隙に逃げたのに

いつのまにかまわりこまれてるんだもん」

「ちい姉さまからは逃げられないのよ」

召喚の思い出と人事異動の顛末（後書き）

転生者がカトレアを助けてしまった事と

クロス要素に翻弄される掌編でした。

執事の事情

気がつけば草原にいた。

私の目の前にはローブ姿の金髪の青年がいる。

「僕の名はブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ。」

君達の言い方では英霊で世界に召喚された守護者だよ。

実は君に仕事の依頼があつてここに来てもらったんだよ。

僕ハルケギニアの世界に使い魔として召喚されて欲しい。

報酬は受肉して君の思うままに生きることだよ。英霊エミヤ」

そして、そんな事を言い出した。

「なぜ私が？」

問い返して自分に意思と言葉が備わっていることに気がつく。

英霊の座から呼び出された身であるにもかかわらず、

後始末を行うだけの殺戮兵器ではない。

「正直、その手の質問にはうんざりしているんだ」

ソレは私の質問にため息をついて答える。失礼な奴だ。

「僕の世界に本来存在しない因子が多数混入した。
ハルケギニア

調整しなくてはならない。それに君が選ばれた。

英霊なら他から魂を引っ張ってくるより穴が小さくてすむしね。

これが君がここにおいて仕事に向かってもらう理由だね。

意思と言葉が与えられたのは仕事が殲滅じゃないからだよ。

さあ、覚悟はいいかい？」

一応、疑問には答えてくれたが、

仕事内容以外はいつもどおり否応なしらしい。

「覚悟もなにも毎度のことだ。仕方あるまい。

だが何故私かは答えてないぞ。英霊なら他にもいるだろう。

それに私を投入してもイレギュラーが増えるだけではないかね？」

私は目の前の男に問いを重ねる。

「さあ？僕も仕事を振られただけで意味までわからないよ」

男は肩を竦めて無責任なことをいう。

「僕は世界間の仲介を任されただけで詳細は知らされてないんだ。

世界の都合に振り回されるのは何時もの事じゃないか？

あと本当なら君の世界の仲介人もいる。守護者じゃないけどね。

今は忙しくて手が離せないそうなんだ。

君が選ばれたのは君がその人の系譜で手っ取り早いからだって。

キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグさんていうんだけど。

会いたかった？ あ、この杖が代理だったさ」

「イヤア、才会イデキナクテ非常ニ残念ダナア」

「あはー。士郎さん本音だもれですよー？

それから私の存在を無視しないで下さい。

そんな反応されたらルビーちゃん

うれしくて告げ口しちゃうそうです？」

ワレナガラレイセイな反応にブリミルの持つ魔杖がツッコんでくる。

オネガイヤメテ。

俺とルビーの漫才を無視してブリミルが告げる。

「さあ、もう時間だ。はじめようか。英霊エミヤ」

そして杖を掲げる。^{ルビー}

草原からブリミルとルビーの姿が消えた。

代わりに現れたのは杖を持ちマントを纏った少年。

周りには少年の同年輩、同じ意匠の服の少年少女たち。

「前非を悔いて心を入れ替えます。どうか命だけはお助け下さい」

そして私を召喚したと思しき少年が土下座を始めた……………

「……………なんてこともあったな」

「あらシロウさん。考え事とは随分余裕ですわね？」

現実逃避する私に桃色^{カトレア}の魔王が単色の瞳の笑顔で告げる。

右手に杖。左手にかつて主^{マスター}であったボロクス。

「さあ、もう時間です。

そろそろ始めましょう。

覚悟はよろしいかしら？」

そして杖を掲げる。

私が最後に見たのは溜め息を吐くルイズ嬢と

手を合わせてこちらを拝む平賀才人だった……

執事の事情（後書き）

1 話士郎サイドの掌編でした。

渡し場にて (閑話「ある雑談」改題・移動)

私は三途レテの川の渡し守カロソ。

現世の亡者を冥府へ送る告死天使アスライールの一人だ。

今日も今日とてここにやってくる亡者に乗せるため

川辺の棧橋に渡し舟を繋いで待機している。

おや、早速今日一人目のお客さんがやってきたようだ。

迎える為に船から下りてそちらに向かう。

「お久しぶりです。ご機嫌いかが？」

そんな声が私にかけられる。

亡者はそんな事を言わない。

お客さんではなく何時もやってくるあの娘らしい。

「また、お前さんかい。物好きな事だねえ」

「好んでお邪魔しているわけではありませんわ。

ご存知でしょうか？私の母様の容赦なさを」

最近、馴染みとなった顔に挨拶の声をかけると、

苦笑交じりの返事が返ってくる。

彼女の名はカトレア。トリステイン王国ヴァリエール公爵家の次女だ。

彼女はハルケギニア史傍流の生まれで前世の記憶を持つ存在。

本流とは違いある男により治癒され壮健となった。

以降「烈風カリン」の娘に恥じぬ成長振りを示している。

将来は桃色の魔王とでも呼ばれるのかねえ。

ただ、今はまだ未熟で時々こうやって私の元を訪ねてくる。

「で、今度はどうやってここに来たんだい？」

「ええ。いつもどおり母様に特訓をつけられましたの。

今日は竜巻ストームで巻き上げられたのを利用して、

瀑布ウォーター・フォールを集中して大量の水で身動きを取り難くして

視界も塞いだ状態で上から刃ブレイドで切りかかったのですが………

「

結果は？」

「ウォーター・フォールアイス・ウォール
瀑布の水で氷壁を作られて防がれました。」

そのまま氷壁を大きくした氷の棺に閉じ込められてお終いです」

アイス・ウォール

「氷漬けかい。まだマシな方だねえ」

「実戦なら壁状ではなく剣山状で串刺しでしょうね」

「優しいお母様だねえ」

いつもの雑談をしてるうちに今度こそ本当のお客さんがやって来た。

「あらあら。これはワルド夫人。どうもお久しぶりです」

「ヴァリエールのカトレアさんじゃないの。」

「ここは貴女が来る場所ではないわよ？」

気軽に挨拶するカトレアと不審げなワルド夫人と呼ばれた女性。

「いつもの事ですね。母様との特訓の後にはよく参りますの」

「そ、そう。カリーヌ様は厳しい方だとは聞いていはたけど……」

「貴女も大変なのね。無理して体を壊さないようにね？」

賽の河原で交わす会話ではないねえ。

「ほほほ……。それよりも夫人。ここにこられたと言う事は……。」

「ええ。私はもうハルケギニアから去らなくてはならないの。」

夫と息子達をよろしくね？ それから姉妹とも仲良くね？」

「……微力を尽くします」

ハルケギニア本流の知識があるカトレアは微妙な返事をする。

夫人はそれに気付いたのか気付かないのか軽く会釈して船へ向かう。

「さて、私は仕事だよ。お前さんはもうお帰り」

「ええ、お邪魔しました。多分また参りますわ……。」

少し背中を煤けさせながら現世に戻ってゆくカトレア。

さて、今日も忙しくなるかねえ。

その後カトレアがワルド子爵家へヴァリエール公爵の注意を向け、自らも関わりワルド裏切りフラグを折ったが私にはどうでもよい事だ。

初恋カトレアの人を別の男に取られたワルドが今度は妹のルイズに走り

ルイズの使い魔にやっぱり取られたのもさらにどうでも良い事だ。

そして今では「それ程わしの娘が気に入ったか」と公爵に目をつけられて

ワルドはエレオノールの婚約者にされたそうだ。勿論逃げられない。

これはカトレアに送り込まれてくるようになったモット伯エロ生物の話だ。

ちなみに彼は私に言い寄ってきたので河原でスケキヨ君にした。

全くあの娘カトレアも何でこんなのがいいんだらうねえ。

渡し場にて (閑話「ある雑談」改題・移動) (後書き)

三途の川ネタの掌編集でした。

9 / 2 1 閑話から型月に移しました

高校生と使い魔の間

俺の名は平賀才人。

彼女募集中の平凡な高校生。

現在被害者Aにジョブチェンジしつつあります。

具体的には後ろから拘束されて首筋に牙を突き立てられ血を啜られ
中。

「あぎぎぎぐげがががあああ……」 吸血の苦痛に身を振る俺に

「騒ぐなこの餌が」 後ろの見知らぬオッサンが無理を言う。

どうやらこのオッサンは吸血鬼らしい。

オッサンが喉を鳴らすたびに俺の中から命が抜けていくのがわかる。

手から修理の終わったばかりのパソコンが滑り落ちる。

薄れ行く意識の中で俺が呟いた言葉は「彼女欲しかったな」 だっ
た。

「最期の言葉がそれか。アホなのか大物なのか……」 呆れ気味の
オッサン。

どうでもいいが血を吸いながらよく明瞭に喋れるな。

その思考を最期に俺の意識は消失した。

次に俺が気付いた時には戦いが行われていた。

一人は吸血鬼のオッサン。もう一人は見知らぬ神父さん。

オッサンは優勢に戦いを進めていた。

神父さんは全身から血を流し足許も覚束ない。

ただオッサンは完全に神父さんに気を取られていた。

俺は横の工事現場から調達した柵用木杭を後ろからオッサンの胸に突刺す。

「オッサン後ろ後ろー」 親父から教わったドリフネタを披露してみる。

思いがけず大ダメージを受けたオッサンは愕然と振り向く。

振り向いて愕然としたまま神父さんの変な剣で貫かれて灰になった。

「助かったよ。危ないところだったんだ。お陰で……」神父さんは言葉を切り、

「……手遅れだったか。すまない。せめて私が引導を渡そう」俺を殺しに来た。

しかし既にボロボロの状態の神父さんは俺にあっけなくねじ伏せられる。

そして状況がつかめない俺に説明してくれた。

「死徒に血を吸われた者は屍食鬼グールから生きる死体リビングデッドを経て吸血鬼へと成長する。

しかし、ごくまれに過程を飛び越え吸血鬼になれる素質を持つものがある。

それがお前だ。そして親を倒したお前は今この時より自立した死徒だ」

俺に取り押さえられた神父さんはそんな説明をしてくれた。

「え、なんでさ。そんなんイヤだよ人間に戻してくれよ？」

「残念だが無理だ。お前はもう死んでいる。死者は土に戻るのみ。

私にできるのは速やかに苦痛少なく終わらせてやる事だけだよ」

死の宣告をされた俺はその場から逃げ出した。

神父さんは追って来なかった。

怪我のせいかそうでないかはわからない。

体はすでに死者 「いやだ。死にたくネエ」 でも心はまだ人間として生きている。

両親に迷惑をかけない為に俺は遠地の学校の寮にいと暗示をかけて家を出る。

「じゃあ行つて来るから」 何でも無い様に別れを告げる。

「体には気をつけるのよ？」 母親の気遣いが辛い。

俺はそう優れた死徒ではなかったが一つ有利な特徴を持っていた。

効率の良さ。ごく少量の吸血でその身を維持することができた。

「痕跡は少ない方がよいな」 吸血を手早く済ませ立ち去る

しかし、それは日陰者としての生活だった。

「くそつ。あいつしつげえ！」 教会に追われる。

「おー熱い熱い。玉のお肌が台無しだぜ」 朝日に追い立てられる。

「あー照り焼きバーガー食いてえ」 夜の月の下を孤独に歩く。

人と太陽と月が、俺には共に歩く者のないことを告げる、心休まらない日々。

逃亡生活が続き、体だけでなく心も死にかけていた俺は

「カレーの匂いがする……。よし今夜の吸血しよくはあのお姉さんだ」

- 日常恋しさから、標的の選定で致命的なミスを犯した。

そして三分後、間の抜けた死徒は黒鍵で壁に縫い付けられていた。

やたら強い青い髪のお姉さん - 代行者は俺に向かって

「最期に言い残すことはありますか？」冷たい声で告げる。

目が見えない。しかし嗅覚と聴覚は何とか生きている。

俺は鼻をくすぐる匂いにつられて言った。

「ではその美味しそうなカレーパンを下さい」

一週間後俺は三咲の有力者の遠野家で使用人として働く事となった。

代行者の人格を陶冶したインドの死徒は俺の恩人です。

一言で言えば遠野家はトンデモない所だった。

当主の兄の恋人は真祖の姫。

当主の客人は死徒になりかけの錬金術師とその相棒の聖騎士。

との遭遇。

「覚悟はいいかしら?」「不可こ-」 当主のスカートの中に頭部が突入。

「才人さーん。翡翠ちゃんを泣かせましたねー?」同僚の双子の妹の胸を触って、

「ちよつ、不か……アーーッ!」 その姉による実験のお手伝モルモットい。

両親にも卒業して就職したと辻褃合わせの暗示をかけ再会できた。

食べる必要はもうなかったが久しぶりの照り焼きバーガーには涙が出た。

失った平凡を取り戻したかに見える日々。

しかしそれはあっさり失われた。

流しで皿洗い中に現れた「鏡」に吸い込まれることで。

「アンタ誰?」

死徒になっても直らなかつた自分の好奇心が恨めしい……

高校生と使い魔の間 (後書き)

召喚までの掌編でした

召喚と人事異動の顛末

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

五つの力を司るペンタゴン。我が運命に共に立つ使い魔を召還せよ！」

最後の一度と許された挑戦でついに召喚のゲートは展開された。

先ほどまでの失敗の連続が嘘のようだ。

これにルイズは漸く安堵する。

しかし気を抜くのは早かった。

ゲートから現れた存在は彼らの意表をついた。

それは使用人のお仕着せの16・7歳の少年に見えた。

台所の片付けをしていたのか両手にはそれぞれ濡れた皿とふきんを持っている。

どう見てもどこかの屋敷の奉公人だ。

「アンタ誰？」

呼び出したルイズが思わず不審げな言葉を発する。

使い魔召喚では普通、人間を呼び出したりはしない。

「え、えっと、平賀才人。遠野家の使用人をやっています……」

「って、あんたらこそ何だ？ 今、俺を強制召喚しなかったか？」

才人は戸惑いながら答える。

「そうです。あなたはミス・ヴァリエールに使い魔として召喚されました」

監督役のコルベールがそれに答える。

「そんなコルベール先生！ 平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません！」

驚いて詰め寄るルイズにコルベールは指摘する。

「退学のほづがよいのかね？」

「うぐう……」

一言もないルイズ。

「俺が使い魔？ 勝手に召喚しといてふざけた事いうなよ。」

「つーか俺^{死徒}を召喚って、なんちゅう無茶苦茶な」

二人のやり取りを聞いて文句をいいつつ、あきれた様な物言いをする才人。

「立場を弁えなさい平民。貴族の会話に割って入るとは無礼ね」

そんな才人を鋭く制するルイズ。

しかし才人は怯むことなく言い返す。

「俺の国では貴族制度は昔に廃止されてるから平民呼ばわりされる謂れは無いよ。」

あんたらの国で貴族制がまだ残ってたとしても俺はこの国の人間じゃないし、

自ら望んで来たわけでもない。雇い主でもないから従う理由もない。

それどころか召喚という名目で人をいきなり誘拐して奴隷にしようとする奴と、

その共犯に、ちょっとばかり思い知らせてやってもいいんじゃないかな？」

そして殺気を当てる。

才人は死徒としての格は低いが、充分訓練され死線も潜っている。

そんな存在に殺気を当てられたルイズ達はそれぞれ反応する。

ルイズや周りに残っていた生徒や使い魔達の大方は初めての経験に立ち竦む。

修羅場の経験があるタバサは瞬時に戦闘者と化する。

元軍人のコルベールも戦闘者と化しルイズを守る立ち位置を確保する。

そして、一時は竦んだものの、ルイズは負けじと平然を装って問いかける。

「ヒラガサイトといったかしら。それでは貴方はどうしたいの？」

ここで暴れても何の益もないわよ。中々の実力を持っているようだけど……

これだけの数のメイジを相手に何とかできるかどうかくらい判るでしょう？」

ルイズの言葉に十人以上の生徒が杖を構える。

別にルイズに義理がある訳ではないが貴族を軽く見られた事への反発からの行動だ。

「それに、その見慣れない風貌。あなたは随分と遠くから呼び出されたようね。

この場を切り抜けたとしても、どうするの。未知の土地で行き倒れるだけよ。

加えて、ここにいる人間は少なからず権力と縁がある。

あなたは追われる身となる。愉快なことにはならないでしょうね。

ここはひとまず契約を交わし学院に落ち着いてから身の振り方を考えてはどう？

使い魔となれば少なくとも衣食住の保障はするわよ」「

不幸な未来図を示した上で説得を試みる。

「勝てないなら逃げればいい。」

お前さん達のスピードとスタミナじゃ追いつけないさ。

その竜は速そうだが、一人や二人ぐらいならどうにでもなる。

野外の活動は別に苦にはならんし、野の獣どももあんたらより弱いだろ。

それに貴族なんてものがある以上、その生活を支える平民が必ず近くにいる。

いずれ大きな町でも見つけてそこに潜り込むさ。

そうすれば戦闘力と権力では闇に潜んだ俺を見つけて出すことはできねえよ」「

才人は即答する。

死徒化の後の逃走と遠野家での生活では戦闘以外にも、

裏社会との接触や野外活動を含む様々な経験を積んでいる。

そこに虚勢はない。

「……なら何を望むのです。ヒラガサイト」

才人を見据え問いかけるコルベール。

「当然、元いた場所への送還だ。他に何がある。俺を家族の元に戻せ。」

あんたらには使い魔を召喚して従属させる事は重要らしいが俺には関係ない」

「無理よ。召喚呪文はあっても送還の呪文はないわ。」

使い魔召喚はメイジの一生のパートナーを決めるもの。送り返す理由がないもの」

「そうか。ならあんた達には用はないな」

言い切るルイズを見て逃走しようと身じろぎする才人。

「話は最後まで聞きなさい。」

送還呪文がない、というのはあくまで必要がないから知られていないと言う意味よ。」

「実在する可能性がないということではないわ」

言葉を重ねるルイズ。

「……………何が言いたい？」

警戒するように問い返す才人。

「ここは魔法学院よ。」

図書館はじめ魔法に関する手がかりは他のどこよりも多いわ。

暴れるのも逃げるのも勝手だけど……………大人しく従った方が機会は多くならないかしら。

ああ、ついでに言うとな私の姉様は魔法を研究するアカデミーに勤めているの。

人間の使い魔には興味を持つかもしれないわね」

努めて平然と言うルイズ。

内心では逃げられれば後はないと冷や汗をかいているが。

あと、実際は人間ではなく死徒^{吸血鬼}だが今ルイズに知り様がない。

ルイズの言い様は才人の要求がわかったので餌をぶら下げただけ。

ルイズには図書閲覧を許可する権限もアカデミーの研究内容に干渉する影響力もない。

何も具体的に約束したわけではない、空手形も同然だ。

「あるかも知れない。で、俺を縛ろうというのか？ 少しいい加減じゃないか？」

そのあたりは才人も判っているようだ。

「そうね。でも現状では次善ではあると思っけど。

まあ人間を普通の動物の使い魔扱いというのは確かに問題かもしれないから、

私があなを雇うということかどうかしら。

あなたはどこかの奉公人のようだから、私の身の回りの世話をする召使い扱いで」

才人の言葉を認めつつ集まる視線を意識しながら続けるルイズ。

あくまで主従関係を結ぶ形で体面を守りつつ相手の妥協を引出す提案をもちかける。

少し落ち着いて考えれば才人にとってもこの話は最善ではないが悪くもない。

奴隷ではなく召使いとするといっているので遠野家での立場とあまり変わらない。

詳細を詰める余地があるとはいえ帰還の手がかりを探すとも言っている。

そしてなにより逃亡生活は御免だった。

死徒化してから1年間に命をかけた逃亡の経験があるので追跡を振切るのは可能。

しかし、あの孤独と絶望の再現はできれば避けたい。

突然の召喚と従属の強制に反発し強気に出た才人だが、それが偽らざる本心だった。

「……………条件しただいな」

才人は折れることにした。

結局、才人は学院の奉公人として雇われた。

ルイズ付として学院に出向し、使い魔兼学院の召使いとして働く。

フェニアのライブラリの閲覧もオスマンから許可を貰った。

こうしてルイズは使い魔を得、平賀才人はハルケギニアでの居場所を得る事で

一応の決着がついた。

あと召喚から才人がずっと両手に持っていた皿とふきんは、

異国の珍品として綺麗にした後ヴァリエール家に献上された。

召喚と人事異動の顛末（後書き）

契約までの掌編でした。

皿はジノリ。ふきんは抗菌竹繊維製です。

試し斬りと取り引き

トリスタニアで買い物終えて魔法学院に戻ったルイズ一行。

才人は風竜シルフィードから降りるとルイズに買ってもらった剣を改める。

「まったくエライ奴に買われちゃったな。お日様ハイデライトウォーカー吸血鬼たあね」

ぼやくのは行きにはなかった男の声。

インテリジェンスソードのデルフリンガー。

本人は強力な魔剣だと主張する。

実際、虚無ゼロの使い魔ガンダールヴの左手であり魔法吸収能力などを
持っている。

しかし能力を隠した上、具体的な事を覚えていないので信用されて
いない。

見た目も赤鯛で、お世辞にもよろしくない。

しかし頑丈そうではあり、それが購入の決め手だった。

「俺の力で振り回しても壊れそうにないのがいいな。普通の剣はす
ぐ折れそうだし」

「まで相棒！ 今、聞き捨てならん事言わんかったか!？」

「大丈夫だつて。我慢してくれよ」

「イヤ~~~~~!?!」

才人はデルフリンガーを八相に構え袈裟懸けに切り下ろす。

その一撃で固定化のかかっている筈の建物の石壁に深い鮮やかな切り跡が走る。

「ほら。見ての通り業物だよ。デルフには刃こぼれ一つない」

その常識外の威力に一同は声もない。

ただしデルフリンガーは折れなかった安堵で声が出ないのだが。

しかしルイズは自分の使い魔が学院の施設を損壊した事実には思い当たる。

「ちよつと!? アンタなに壊してんのー!!」

「あ、ゴメン。つい」

「『つい』じゃないわよ!?!」

二人が騒いでいると少し離れた地面が盛り上がる。

それは見る間に巨大ゴーレムと化しルイズ達の方に歩み寄ってきた。

「何だよこれ!?!」 「何でゴーレムが!?!」

踏み潰されてはたまらないので一同はゴーレムの進路から待避する。しかしゴーレムは彼らには頓着せず拳を振り上げると壁に叩きつける。

打撃を幾度か繰り返すと才人がつけた傷が徐々に拡がり壁は崩壊してしまふ。

崩壊して中に通じた部分から黒ずくめの人物が侵入する。

「誰が入ったわね」

「宝物庫」

「盗賊で土メイジ。『土くれのフーケが壁を壊して』宝物庫に侵入したわ！」

「盗賊？ 捕まえたほうがいいのかな？」

「アレも斬るのかよ。相棒」

突発事だが誰もとり乱しておらずルイズなどは壁の損壊をフーケに押し付ける積りだ。

とりあえず目前のゴーレムを攻撃する一同。

しかし確固とした質量をもつゴーレムにタバサの風やキュルケの炎は相性が悪い。

ルイズも失敗魔法で攻撃するがやはり表面を削るだけで効果が薄い。

才人の斬撃も多少ゴーレムの体を崩すが傍から再生してしまう。

一度は才人がルイズを庇って蹴り飛ばされ壁に叩きつけられもした。ただしこちらにも直ぐに再生して戦列に復帰する。

「ちょっと全然効かないわよ。どうするの？」

「これじゃ駄目だね。サイト。ゴーレムを引きつけておきなさい。

三人と風竜で術者の方を何とかした方が早いわ」

「おいおい一人でかよ。まあ何とかするけど」

「……手遅れ」 「手遅れだぜ嬢ちゃん」

一同がゴーレムに釘付けにされている内に侵入者は仕事を済ませてしまっており、

棒状の荷物を抱え宝物庫から出て逃走にかかっていた。

フライで学院の壁を越えようとする侵入者を

才人がゴーレムの体を足場に素早く城壁まで跳び上がり

斬撃を加えるが皮一枚の浅手でかわされる。

侵入者はそのまま森の暗がりの中に逃れていった。

“ 追つか？ ” 才人は迷う。

速度だけなら走ろうがフライを使おうが人間を逃すことはない。

夜の闇も苦にならないどころかそれこそが死徒の本領だ。

浅手を負わせたことで血の匂いも覚えた。

逃す要素はない - が、しかし……。

「狡兎死して走狗煮らる。盗品を取り戻して賊は逃がす。

できれば学院にも盗賊にも恩なり貸しなり作っておきたいな」

「相棒、黒えなあ」

「望んで使い魔やってるわけじゃないからな」

才人はデルフリンガーに応えると追跡を始めた。

「くそ、離しな！なんて力だい！」 追跡は10分かかけず終了した。

「あんたは……学院長秘書でセクハラされてた……。下着の色が白で名前は……」

「ロングビルだよ！ 下着は関係ないだろ！？ あんたエロジジイの同類かい！！」

「相棒、何で目えそらすんだよ？」

オスマンに何か通じるものを感じていた才人は一瞬言葉に詰まるがすぐ気を取り直す。

「今日はいろいろあったんで少し疲れてるんだ」

トリスタニアへ行く途中キュルケが才人をダシにルイズをからかうのを仲裁したり、

買い物中キュルケが才人をダシにルイズをからかうのを仲裁したり、学院に帰る途中キュルケが才人をダシにルイズをからかうのを仲裁したり。

「とりあえず原因の一つのあんたから取り立てるとしようか。」

「ゴーレムに蹴っ飛ばされるのは結構痛いんだ。ついでに胃も痛いし」

半ば八つ当たり気味に言うとロングビルの首筋に牙を立てる。

「な、何を？ あ、あんた吸血鬼……！ や、止め……！ やああ、ああ……」

「ふう、ご馳走様でした」

才人は吸血のショックで気絶したロングビル -

フーケを地面に寝かせると彼女が盗んだ物を改める。

「は？ ブローパイプ携行地对空ミサイル？ 何でこんなもんが？」
出てきた物の意外さに驚く才人。

しかし考えても答えは出ないので後でオスマンに聞くことにする。

才人はフーケを正気に戻し取引を持ちかける。

「俺はあんたの正体を明かさない。盗品を取り戻した功績も山分けしよう。」

その代わり情報を融通してくれ。俺はトリスティンの情勢に疎いんでね」

才人の言葉にフーケは考える。

学院の給料は大仕事に比べれば見劣りする。

しかし故郷の大家族を支えるに一応は足り、何より安定的だ。

それに断れば才人は自分を官憲に突き出して手柄とするだけ。

フーケは一つだけ条件を出して妥協することにした。

フーケによる盗難の顛末を報告した後、才人はオスマンとだけの話を求めた。

「……儂を助けた時には彼は既に重傷を負っていてな。

すぐ学院に運んだのじゃが看護の甲斐無く亡くなってしまった。

その後、飛竜倒すのに使った『破壊の杖』は彼と一緒に埋葬して、

残りの1本はを恩人の形見として宝物庫で保管していたんじゃ」

語り終わると、恩人を思い出してかしみじみとなるオスマン。

「そうでしたか。俺の故郷のことが何か分かるかと思ったんですが……」

「済まんのお。代りと言っては何じゃが儂の手持ちから少しばかり報酬を出そう」

「それではコレをお願いします」

そういう才人の手にはオスマンの使い魔モートソグニルが握られている。

「実は相談を受けまして。学院長室にネズミが出て困っているとでは失礼します」

「ま、待てサイト君！ 儂の使い魔をどうするつもりじゃ!？」

もがくモートソグニルをつれて部屋を出ようとする才人。

それを慌ててオスマンが呼び止める。

「質の悪い覗きネズミ。汚物は消毒だと言います。燃やしてしまいましょう。」

それとも重しをつけた袋に詰めて川に放り込むか、生き埋めにするか。

オスマン氏はどれが宜しいですか？」

ロングビルが才人と取引した際に出した条件。

それは学院長のセクハラをどうにかすることだった。

結局この一件は才人がネズミモトソグニルを解放し学院長は胸を撫で下ろす。

そして尻を撫でられる事が無くなった秘書にとって満足が行く結果となった。

試し斬りと取り引き (後書き)

マチルダが食吸血われる掌編でした

蝶の羽ばたき、疾風と炎蛇と、主に土くれ

私はギトー。トリステイン魔法学院の教師だ。

現在生徒相手に講義の最中だ。

「良いかね諸君。魔法は使い手のイメージに左右される。

ドット、ラインと言ったランクは勿論重要だ。

が、如何に使いこなすかでメイジの真価が問われる。

例えば……ミス・ツエルプストー。最強の系統は何だと思っね？」

「虚無じゃありませんか」

授業にあまり興味がなさそうな生徒に質問を振ると、

メイジとしては常識的な答えが返ってくる。

「うむ。それも間違いではないが、虚無は失伝状態だ。

「この際それは省いて考えたまえ。」

「ならば火ですわ。火の本分は破壊と情熱。全てを焼き尽くします

わ。」

「フムそう考えるか。ならば君の炎で私を攻撃してみたまえ」

私の言葉に一瞬驚いた彼女は気を取り直すと昂然と応じる。

「火傷ではすみませんわよ？」

「構わない。全力できたまえ。その赤毛が飾りでないのなら殊更に挑発するように言つてやる。」

私の答えに彼女は目を細めると呪文を唱える。

前方の席の生徒が慌てて横に退く。

そして彼女から巨大な炎球フレイムボールが飛んでくる。

私はそれを風を纏わせた杖で窓の外に弾き飛ばすと、彼女が再び呪文を唱えるより先に近づいて杖をその肩に置く。

「これで君は討ち取られた。」

実戦では火球を本人に打ち返してそれを盾にすれば

より安全に距離を詰められる。覚えておくように「

彼女に背を向けて教壇に戻りながら講釈を垂れる。

ここで不意打ちをしてくれば加点してやるのだが……。

と思っていると別の方から風刃ウインドカッターが飛んできた。

今度は杖でそれを絡め取って教壇につく。

「うむ。油断した相手に背後から一撃を加える。

中々良い判断だ。ミス・タバサに5点プラス」

一連のやり取りに唾然とする生徒達と

悔しげにしているミス・ツエルプストー。

そして表情を動かすミス・タバサ。

まあ「誇り高い」トリステイン貴族の、それも学院教師が

不意打ちを肯定すれば珍獣扱いにもなるだろう。

「攻撃力においては確かに火は風に勝るだろう。

が、それならば今のようになして直撃を避ければよい。

繰り返すが魔法は使い方次第だ。心得ておくように。

後、最後にモノを言うのは体力だ。

行軍で消耗して実戦で満足に魔法を使えないでは話にならん。

各自その辺りも鍛えておくように」

決まったな。と、内心自己満足していると急にドアが開かれる。

年長の同僚のコルベールだ。随分興奮している。

着飾っているのはいいがその髪は何のつもりか。

「授業中です。」

それにそんなに慌てていると髪が滑りませんが、ミスタ・コツパゲール」

「だまらっしゃい!？」

モット伯とつるんでるのに、いつも一言多いから君はモテンのです!」

私の指摘に普段の温厚さをかなぐり捨てて怒鳴るコルベール。

ところで今なんつったよ、このハゲ。

「ほほう? 彼女いない暦イコール人生のミスタ・コルベールが仰るものですか。」

お礼によい毛生え薬を作る水メイジを紹介致しましょうか?

ミス・モンモランシーの父上がその道の大家とか」

「私を巻き込まないで下さい!？」

何か涙声が聞こえるが無視。

「ははは……ミスタ・ギトー。」

「君とは常々話し合わないといけないと思っていたのですよ。」

「ふふふ、それは奇遇ですな。私もそう考えていたましたよ。」

互いにハイライトの消えた瞳で低い笑い声を交わす。

生徒達が何故か引いているが何かあったのかな？ ふふふ。

「あ、あのコルベール先生。何か御用があったのでは？」

そこにミス・ヴァリエールの使い魔の青年が割り入ってくる。

モット伯は死徒とか言っていたが良くは知らない。

確か、ハイデライトウォーカーお日様吸血鬼という中々に人を舐めた存在だ。

「おお。そうでしたな皆さん授業は中止です。」

恐れ多くも王女殿下がこの学院に御幸されます。

直ぐに歓迎の準備をしなさい！」

気を取り直して本題を告げるコルベール。

……あの腹黒王女が今度は何を企んでるのやら。

マザリーニ枢機卿も苦勞が絶えんな。

「諸君聞いての通りだ。本日の授業はこれまでとする。」

部屋に戻って準備をしたまえ。ただし鬘はいらんぞ」

私の言葉にコルベールが杖を向けてきたので応戦しようとする。

が、気がつくとも杖が無い。コルベールも同様だ。

「だああ！アンタはもう喋るな！！」

コルベールさんも何で今日はそんな沸点が低いんですか!？」

仲裁する使い魔の青年の手の中に二人の杖がある。いつの間に。

「「サイトノ使い魔君。」

人には許容し難い存在がある。

そしてそれこそこの男だ」「

同時に答えを返し互いに嫌悪の視線を交わす。

「サイト。放つときなさい。」

二人揃ってミス・ロングビルに振られてムキになっただけよ」

「「ミス・ヴァリエールそれは違う。」

「この男がミス・ロングビルにまとわり付くのを注意しているだけだ」」

また答えが重なり睨みあう私とコルベール。

それを見た使い魔の青年は一つため息をつくと杖を教壇に置き教室から出て行く。

気がつくとも他の生徒もいなくなっている。

こうしてはいられない。早く歓迎の準備をせねば。

ハゲなぞどうでもよい。

杖を取り戻すと直ぐに部屋に向かう。

「アンタも大変なんだな。学院長だけじゃなかったのか」

「お願いだから言わないでくれ」

通りがかったミス・ロングビルが頭痛を堪える様子でこちらを見ていたのを

使い魔の青年が肩を叩いて慰めていたが、急いでいた私達は気がつかなかつた。

蝶の羽ばたき、疾風と炎蛇と、主に土くれ（後書き）

一体誰得なギター、改変の掌編でした。

ギターはコルベールとの求愛合戦ストーリーキングで覚醒しました。

使い魔は逃げ出した

才人は避けていた。

何から？

「フハハハッ！踊れっ！踊れえっ！！才踊れえええええっつっ
！！！！」

凶雄しく叫ぶギトーと五体の偏在から繰出される無数の風刃弾幕が
ら。

「のおおおおおおおおおおおつっつっつ！！！！？？？？」

コルベールはいつもの温和な声と笑みを湛えた表情と

いつもはないハイライトの消えた瞳で才人に語りかける。

「サイト君。君はいけない魔法に掛かってしまった様だ。

私が全力を以って解除してあげよう。遠慮することはない」

その間にも炎の蛇が弾幕の届かない地面間際を這って

弾幕を避ける才人を妨害するように絡み付こうとする。

「熱っ！あ痛っ！？ちよつとアンタ等なにすんのコレ！？」

無数の疾風と複数の炎蛇から身を躲しながら

いや避けきれず裂傷と火傷を作りながら

唐突な猛撃に晒された才人が叫ぶ。

復元呪詛で多少の傷は問題ないとはいえ痛いものは痛い。

「アンタがミス・ロングビルに手を出したのがバレたのよ」

離れた所から才人の疑問にルイズが応える。

その冷たい眼差しと声から察するに助ける気は無い様だ。

「先生方。お邪魔になりますから私は手を出しませんわ」

「誤解だ！だって俺ロングビルさんに手を出してないよ!？」

「「「昨夜はミス・ロングビルの部屋でお楽しみでしたね」」」

「え!？そっそれは……。違うんだ！

ただアレは一寸頼みごとをしようか……っ!」

破壊の杖盗難事件で知ったフーケの正体がロングビルであることを
隠す事と、

彼女から受けたオスマンのセクハラを撃肘する依頼。

その対価として血を少し頂いていたのだが正体については言えない。

「「艶めかしいミス・ロングビルの声。」

彼女にそんな声を出させるなんて

このエロ使い魔は何をしていたのやら」「」

吸血時の喘ぎ声を聞かれていたらしい。

「いやっ！なんでっ！聞いっ！てたのっ！アంత等っ！？」

そもそもっ！どこでっ！聞いっ！てたんだっ！？」

攻撃を躲しながら

時々掠りながらツッコむ才人。

「ドアの外にいたメイドシエスタからよ」「窓の外だね」「風の通る壁の隙間からだ」

人それをストーキングという。

結局才人が二人から逃げ切れたのは日が暮れて

死徒の能力を十全に発揮できるようになってからだっただ。

武器を取ってガンダールヴの力を発揮する隙などなかった。

無駄にチート化した嫉妬団であった。

「恋文の奪還にアルビオン行きですか。大変結構。

学院から離れられるというのが特に素晴らしい

王女殿下。我が主ルイズの守りはこの私めにお任せ下さい」

「随分乗り気なのですね？」

あの嫉妬団から逃れる為に才人は乗り気も乗り気だった。

「道案内には最適の人物がいます。

貴方が仲良くされている学院長秘書のミス・ロングビル。

いえ土くれのフーケといったほうがよろしいかしら。

彼女はアルビオン出身のようですし」

「何でわかった？」アンリエッタの言葉に噴き出す才人。

「調べごとは父様の得意分野なのよ。

母様、父様はアンタのことを警戒してる。

フーケ襲撃がアンタ絡みと聞いて徹底的に裏を洗ったそうなの。

本名マチルダ・オブ・サウスゴード。

粛清されたモード大公の臣下の娘。

モード大公の娘への仕送りから足が付いたの」

才人の疑問に何でもない事のように話すルイズ。

ロングビル - いやマチルダか? - と同行する。

これがあの嫉妬団にバレたら?

「俺レコンキスタに亡命しようかな……」

「レコンキスタはガリアの傀儡よ?」

「何でそんな事知ってたんだよ?」

「私の方から出す護衛のワルド子爵が二重スパイだからですわ

彼は少し怪しげな行動をとるかもしれませんが。

でも気づかない振りをしてあげて下さい。

彼はレコンキスタに対する埋伏の毒ですので」

「……せめてルイズは留守番にしてくれ。

ロングビルはご存知の通り隠密はお手の物だし、

ワルドとやらも腕が立つんだろ?」

俺も腕っ節は自信があるし夜陰にまぎれるのも苦手じゃない。

素人がいないほうが潜入工作は成功率が高い」

逃げられないならせめて条件を良くしようとする才人。

「ダメよ。恋文よりも王子の亡命の説得の方が本命なんだから。

それなりの身分の者が大使役をやらないと失礼でしょ？」

薄い胸を張って引き受ける旨を宣言するルイズ。

「宮廷貴族に誰かいないのか。学生にやらせることじゃあない。

モットエロ生物と魔王伯夫妻と士郎さん執事あたりの方が地位があつて腕も弁も立つだろ」

何とか粘る才人。

「私が学院に参りました時にマザリーニを見たでしょう？」

「宮廷に人材がいましたら“鳥の骨”と呼ばれるような外見になり
ませんわ

「伯爵夫妻達には既に国内の押さえとガリア対策で動いてもらって
います」

「ため息混じりのアンリエッタの返答に才人は諦観した。

使い魔は逃げ出した（後書き）

登場人物の能力を全般に下駄履きさせてみた掌編でした。

マザリーニをフルシチョフ並にしたいのです。

保護者Ⅱ 担い手、竜、インテリジェンスナイフ

私が呼び出した使い魔は

ルーンを刻まれたショックで気絶してしまった。

どうやって運ぼうかと思案していると

強風が吹き始め使い魔は紙切れのようにひらひら飛んでいった。

……丁度学院の方だからいいわよね……。

途中気がついたのか「おおう」などと声を上げていた。

気がついたのなら自分で止まれないのかしら……

学院に到着して女子寮の階段を上っていると

使い魔が階段にすわり込んだ。

「あーつかれた」 とか言っている。

「アンタね……」 まだ1階の踊り場にも着いてない。

使い魔の立場を思い知らせるために

食事は薄いスープと固いパン2切れ。

「もうおなかいっぱい」の声に使い魔のほうを見る。

スープとパンが半分残っている。

多くて食べきれないそうさ。

錬金の授業で吹き飛んだ教室の片づけを先生に命じられた。

「ふんっ」 使い魔は机一つ動かすことが出来ず却って邪魔だった。

私の使い魔 「守屋ひより」は貧弱この上ないようだ。

こんなのでやっていけるのだろうか……

食堂でギーシユの落とした香水の瓶に躓いて

ひより が盛大にすっ転んで怪我をした。

しかも私と ひより に二股がバレた責任を転嫁してきた。

「……うざいな」 何か呟いて私に耳打ちする ひより。

私は ひより の進言に従ってギーシュにお詫びにすることにした。
モンモラシとケティに叩かれて腫れ上がった頬を
魔法で治癒してあげたのだ。

ギーシュは3日間授業に出てこなかった。

女の敵を罰した私は学院での人気が少し上がった。

学院長秘書のミス・ロングビルが退職した。

身内を呼び寄せトリスタニアで菓子店を開くという。

ひより から教わったハルケギニアにはないレシピが売りだとか。

確かにあのお菓子は知らないものばかりでとてもおいしい。

きっかけは ひより が学院内で行き倒れていたのを

ミス・ロングビルに助けてもらい、

お礼にお菓子をプレゼントしたことだそうだ。

余談だが実際の作業を行ったのはシエスタというメイドだ。

「料理とは力仕事と見つけたり」

「最近卵が割れるようになりました」

というのが ひより の言葉だ。

後日、宝物庫からフェイスチェンジの効果を持つ

マジックアイテムの首飾りが紛失したことが発覚した。

ミス・ロングビルに去られ、

宝物紛失の責任を問われ落ち込む学院長をみて

「おやおや、心が寒くなったようですね」

と ひより が言っていた。

なぜかギーシュの二股騒ぎの時と同じ笑い方をしていた。

久々にミス・ロングビルの様子を見に行った。

首飾りをした彼女の義理の妹はバストレヴオリューション胸革命だった。

絶望に身をよじる私。

「私はこのままでいいー！」

「なんで!？」 憤ましやかな胸を張る ひよりに突っ込む。

「だってあんなにあつたら重くて動けない」

「ああ……」 納得した。

ミス・ロングビルからインテリジェンスソードを貰った。

留守番代わりに買ったが、

口が悪くて持て余していたという。

まあ、剣に菓子屋の店番をさせれば不満も抱くだろう。

正直こんなものはいらないが、

ひよりのことを『使い手』と呼び連れて行けと言う。

「重いから無理」「いいから持ってみ」「というやり取りの後

掴ませて見るとなんと軽々と持ち上げた。

しかもあの貧弱な ひよりが人並みに動けるようになった。

剣 デルフリンガーが言うにはルーンの効果だそうだ。

「普通は人並み外れた動きが出来る筈なんだが……」とも言ってたけ

ど。

昨日シエフィールドと呼ばれる女に襲われた。

様々な魔法具を操る女で、あわや捕らわれるところだった。

それを防いだのは私の使い魔「じゃっく」ではなかった。

何かが倒れる音とともにすべての魔法具が動きを止めたのだ。

「あーあ。また力尽きやがったか。しゃあねえ撤退するぞ由紀香」

「うう、地下水ごめんね」

などという会話がどこからか聞こえてきた。

ちなみに じゃっく は先に力尽きて足下に倒れている。

私は今一人の女性を運んでいる。軽い。

ロマリアから参戦した竜騎士だそうだ。

しかし、陣中で行き倒れるようで竜騎士が務まるのかしら？

竜舎まで行くと一頭の竜が近づいてくる。

すると、すまなそうに頭を下げ竜騎士を銜えあげて連れて行く。

中々賢い竜だ。

というか彼女、竜に面倒をみられているのだろうか？

まあいい。

次は、やはり行き倒れているであろう

私の使い魔「モーリ」の回収に行かないと……

保護者⇨担い手、竜、インテリジェンスナイフ（後書き）

『ひよわーるど』『より』『守屋ひより⇨弱^{じやうく}モーリ』

（右に行く程親愛度アップ）

『氷室の天地』より、『三枝由紀香』（ペタンクで翌日に全身筋肉痛）

『ファイト！息切れOL』より、『陸』（献血できない、倒れる）が

それぞれ召喚された掌編でした

平穩ぎぶみー

現在俺はトリステイン魔法学院で春の使い魔召喚の儀式に臨んでいる。

そして首尾よく使い魔を呼び出し後は契約するのみなのだが……

はぐれメタルは仲間になりたそうにこちらを見ている。

「なんでぞ?」

ドラクエモンスターを召喚してしまい呆然とする俺。

これってクロス?

俺は転生者だけど温く貴族ライフをエンジョイしてるだけのヘタレだよ?

原作とは無縁に生きると誓ってたのに……。

「どうしましたミスタ・モット。早く契約をなさい。

君の二つ名に相応しい使い魔ではありませんか」

契約しようとしないう俺を監督役のコルベール先生が儀式の継続を促す。

正直俺は気が進まない。

だが「何か面倒に巻き込まれそうなのでイヤです」とは通じないだろう。

前代未聞の人間を召喚したルイズでも異論が認められなかったから。

（まだ召喚してないし、実際は前例がありそうだが）

コルベール先生の言った俺の二つ名は「みずかね汞」という。

水銀製の不定形ゴーレムを扱うことが由来だ。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが使っていた

ヴォールメン・ハイドラグラム
月霊髓液が気に入っていたので真似をしたのだ。

もっとも水のラインメイジの俺では自立性の再現はできなかったが。

さて、使い魔だがどうしよう……

正直言ってはぐれメタルは嫌いではないし、能力的にも期待できる。

たしかギラあたりが使えたはずだ。

俺は火系統が苦手なのでちょうど良い。

ただ、これが原作深入りフラグであることを恐れるのだが……

ま、何とかなるだろう。

前世では仲間にできなかつたしね。これを逃す手は無いか。

俺は契約を無事に済ませ儀式は進行する。

ルイズもひと悶着あつた後、平賀才人を召喚契約した。

そしてルーンの痛みが治まつた才人がこちらを凝視する。

「はぐれメタル？」 違つた俺の使い魔を見ていたのか。

「何だ平民。俺の使い魔を知っているのか？」

とりあえず何も知らない振りをして才人に尋ねる。

「ああ、俺の世界のモンスターだな」

… ナニカ聞キ捨テナラナイコトヲ言ツタネオ人クン。

使い魔の情報に託けて聞き出した話によると、

才人の生まれた世界は俺の前世かそれに良く似た世界

ではないらしい。

才人の出身国はジパング。

1000年以上前に女王の卑弥呼が八岐大蛇に殺され

以降、民主政が導入されているそうだ。

他国では王制もありアリアハンが世界で最古の王国だという。

最近ではアレフガルドに通じる穴が発見され交流が再開されたとか。

あとアフリカのネクロゴンド地方にはモンスターの国もあるとのこと。

ドラクエ？準拠ですかそうですね。

OTLとなっている俺を横目に

「アンタ何ができるの！」とルイズが聞いていたが

「呪文はイオとホイミが使える」との返事に俺の横でorzとなっていた。

加えて剣が使えて特技はドラゴン斬りとメタル斬りらしい。

テメエ俺の使い魔に近寄んじゃネエ。

あ、シルフィードがタバサの後に隠れた。

さて俺の使い魔の名前はユーリです。

俺が名づけたんじゃなく親から貰った名前だそうです。

愛称は ゆづぼう。

始め はぐりん と名づけようとしたら「恐れ多い」と断られた。

はぐりん 何者なんだ？

んじゃスタスタにしようと思ったら鳩尾に体当たりを食らった。

突然の暴行に涙目で文句を言うと、

般若の形相で「あの無節操な犬のことは言うな」と凄まじれた。

とりあえず土下座をしておいた。

スタスタ…お前なに仕出かしやがった……

才人の世界がドラクエ準拠という外は

その後学院生活はテンプレどおりに進んでいった。

決闘イベントは才人が石礫を武器に一体目のワルキューレを破壊。

ギーシュがワルキューレを複数出したところでイオで攻撃。

何回か殴られたがホイミで回復、イオでトドメを刺しギーシュは降参した。

魔法を使ったので厨房の面々にはいまいち受けが良くなかったが

シエスタは貴族の横暴から助けてくれた才人に好意を抱いた。

ちくせう、もげる爆発しろ。

買い物イベントではちゃんとデルFRINGERを手に入れた。

ロトの剣とかではなく、まずは一安心。

でも魔神の斧があったのでゆうぼうの為にその内破壊しておこうと

思う。

フーケと破壊の杖のイベントだが、ブツはなんときわどい水着の上
下。

こんなものを秘宝にしていた学院長にキレたフーケが襲い掛かった
ため

学院長襲撃イベントに変更されてしまった。

アレ並みの鎧より硬くて炎と雷にも強いんだけどね。

そしてアルビオン潜入。

俺はルイズ、才人、ギーシュと共に出立しようとしている。

……なんでぞ。

なんで俺が原作にドッキリ関わってるんだよ!?

はじめに俺は原作と無縁に温く生きるって言ったじゃないか!

「どうしましたマスター?」ゆうぼう が尋ねてくる。

そうだよ、こいつだよ、ゆうぼう だよ!

俺が努めて無関係を保とうとしているのに、

「二股は感心しませんね」とか

「私も王都を見たいです」とか

「貧弱なゴーレムですね」とか言っ

原作と関わっちゃんだよ！ 止めようにも力じゃかなわないし…

魔法は効かない、ヴォールメン・ハイドラグラム月霊髓液でも力不足。

しかも高レベルらしくてベギラゴンやそれ以上の呪文も使えるとか

戦力的には ゆうぼう がいれば大丈夫だし、俺もそれなりだけど

虚無とかエルフとか出てきたらちよつと心もとないし…

ああ、俺の平穩はどこに？

ゆうぼう のつぶやき。

「……マスターには気合が足りていません。

このミッションでたっぷり鍛えてあげましょう。

「つふふ……楽しみです……」

平穩は程遠いようだった。

平穩ぎぶみー（後書き）

ドラクエ（モドキ）から「はぐれメタル」が召喚される掌編でした。

濡れ手に粟？そうは問屋が卸さぬ

ある貴族領の城館図書室にて。

俺は学院の休みを利用して帰省している。

調べ物をする為だ。特に地球の科学技術関係の。

日本語で書かれた本は割と簡単に見つかった。

俺は期待をこめてその手記に目を通す。

梅酒と酢漬^{ピクルス}けのレシピだった。

……今度料理人に作らせよう。

次は英語か。これならそこそこ読める。

『Demon Lord of Karanda - Book
Three of Mallorion』

これは……ファンタジー小説かよ。

前世で愛読してたシリーズだけど途中の一冊だけじゃなあ。

さらに本を手取る。

タイトルは『Metal technology』

おお、金属の技術か！？

期待をこめて本を開く。

ハングル文字だった。

……うん。転生者が日本人だけじゃないって分かってたのね。

でもここはご都合主義で来て欲しかったよ。OTL

気を取り直して次の本をとる。

タイトルは『薬品』。よし日本語だ。

ページを開くとアラビア文字が並んでいた。

「前世にて波斯語ベルシアを覚えたることが役立つとは夢にも思わず」

表紙の裏にはそうあった。

注釈は日本語だったが慰めにもならない。

(地球の) 錬金術っぽいのでそこそこ役立ちそうなんだけど……

お願いだから和訳かハルケギニア語訳しといて……。

今度こそと別の本を取る。

知らない文字で書かれているのに何故か読める。

「約束の1：教団の教えにそむく者は光の国へたどりつけないだろう」

「約束の2：大教祖イブールを信じる者は神に愛されるだろう」

『イブールの本』かよー!!

取り敢ず床に叩きつけておいた。

そろそろ諦めた方が良くかと思いつつも次の本を手取る。

地図帳のようだがあまり精密でない絵地図だ。

その中の一枚に日本語の覚え書きがある。

『見えざる魔神の地図』

い、いやあー！もう堪忍してエー!!

メタルなスライムはウチの鬼軍曹使い魔だけで充分よ！

もう俺のHPはゼロだが敢えて次の本を取る。

『男のワンダーランド』

……ウチの家系が代々女好きなのはこいつのせいか。

いわゆる『エッチな本』です。

性格が変わらない内に本棚に戻した。

結局まともに俺が役に立てられる本は見つからなかった。

『錬金釜レシピ完全版』なんてどうしろと……

ただ漢文の白文があったのでお爺様のところに持ち込んだ。

前世が9世紀生まれの漢人だそうなので一縷の望みを託す。

一通り目を通したお爺様は湯のみから茶を飲み干すと答えた。

「ふむ。大躍進や文化大革命とやらへの恨みが書き連ねてあるの」

その日俺は自分の部屋に籠って不貞寝した。

結局役に立ったのは梅酒とピクルスの作り方のみ。

「ああ、内政チートの夢が……」

「たわけ。そんなものがあつたら疾うの昔に私がやっておる」

父上殿オヤジの尤もな仰せに俺は梅酒を呷った。

「ですよー」梅酒旨えな畜生。

「マスターがそんな甘い事を考えていたとは嘆かわしい。

奥様。今回の件のマスターへの注意は私にお任せ願えませぬでしようか」

「ええ。使い魔とメイジは一生を共にするもの。貴女の良いようになさい」

「はい。実は最近すべての精神力魔力を解放する『渾心の焰』を覚えまして」

「あら。貴女魔力の精神力では些か気になる事になりませんか？」

「問題ありません。『地獄の雷霆』や『始原の閃光』に耐えるマス

ターですよ?。

そのように私が鍛え上げたのです。うふふ……」

「あらあら。それは楽しみですね。おほほ……」

そして俺の迂闊な行動は微笑む母と使い魔にOSHIOKI判定されていただけだった。

濡れ手に粟？そつは問屋が卸さぬ (後書き)

ある魔法学院生徒のありふれた一日を書いた掌編でした。

「油断したな。強力な使い魔を持つとはいえメイジ本人はそれ程でもなかるう」

俺の背にブレードを突き刺したワルドは勝ち誇る。

しかし、そんなワルドをルイズ達は冷めた目でみつめる。

「む、仲間がやられたと言つのに、何だその態度は？」

訝しげに問うワルド。

俺も全面的に賛成だ。

なあルイズさんや。同級生が背を突き刺されたら少しは心配しようや。

それと ゆうぼう。お前さんは俺の使い魔だろう。主人を気遣ってくれんのかね。

ついでに才人。それがエロ犬仲間ソウルブラザーへの態度かい。

「ブレードで切りつけられたくらいで、ソイツがどうにかなるわけないでしょ」

「私は斬られたくらいでどうにかなるような柔な鍛え方をマスターにしておりません」

「そいつの息の根を止めるなら熱湯か洗剤をかけるのがいいんじゃないか？」

信用？ いただき有難うございます。

それから才人。誰がパタリか。大体お前も似たようなモンだろうが。

「確かに俺はまだ動けるが、万一とか思わないのか？」

言いながらブレードを背中から引き抜き、さつさと治癒ヒールを唱える。

瞬時に傷は塞がり、失血を最小限に留める。

鬼軍曹ゆいぐんそうのFF2フルボッコ&ヒール式訓練の成果で治癒ヒールの熟練度、体力と素早さはカンスト前だ。

そんな俺に「全然」と異口同音に三人が答える。

そして呆然とするワルドの偏在ヴォールメン・ハイドラグラムを月霊髓液の刃で切り裂いて消滅させる。

「あーあ、服とマントに穴が開いたじゃないか。

だから俺はお前らに関わるのは嫌だったんだ」

「お前金持ち貴族の息子じゃないのか？」

「もったいないだろ。それに金を持つてるのは父上オヤジと御爺様だよ。

それよりワルド本体が逃げるがいいのか？」

我に返ったワルド本体が窓からグリフォンに乗って飛び去ろうとしている。

「問題ありません」

「うわらばっ!?!」

ゆうぼうが呪文を唱えると轟音と共に崩れる壁の向こうからなにやら悲鳴が聞こえる。

「ちょっと宮殿を壊さないで」

「形あるものはいつか崩れるものなのです」

「いや、お前がやったんだろ」

咎めるルイズに無責任な返事をする　ゆうぼう。そこに才人のツツコミがはいる。

「おい、さっさと逃げよう」

ウェールズ王子を回収しながら漫才を始めた同行者達を促す。

「ちょっと待って。奪われた手紙はどうするの?」

「焼いてしましましょう。あと、汚物は消毒です」

ゆうぼう　が再び呪文を唱えると崩壊した壁で出来た瓦礫が業火に

包まれる。

それと同時に外から鯨波が聞こえる。

「おい、王子がいねーから王党派はさっくり壊滅したようだぜ。どすんだよ」

「ああ、そつだな。さつさと学院に戻ろう」

デルフの催促に才人が呪文を唱えると、一同の姿は宮殿から消え去った。

後には辛うじて瓦礫から這い出し、治癒^{ヒール}で全身の火傷を癒したところまで、

精神力と体力が尽きて倒れたワルドの黒く煤けた姿のみが風に吹かれていた。

何ら痛痒を感じぬ - N E W - (後書き)

メイジと使い魔がHP9999への道を歩みはじめた掌編でした。

ハルケギニアの地獄

「トリスタニアかどこだか知らんが俺は出かけねえぞ」
才人は頑なに言い張る。

「お兄様？どうしたのひどいお顔」

「だいじだごどないヨ」

「そつは見えませんが……」

鼻水と充血した赤い目で二枚目台無しの

ジュリオをジョゼットが心配する。

「ミス・シェフィールド？」

そ、その仮面というか、兜というかソレは何かね？」

名目上は秘書の女性が頭部に被る異様なモノに

ドン引きするクロムウェル。

「これは花粉症マスクというものです」

春のハルケギニアは地獄。花粉の季節

かつて地球から紛れ込んだ針葉樹は

ハルケギニアの風土に合わせて変化し

数千年の時を経て爆発的に増殖していた。

この悪魔の木は豊富な木材をもたらす代わりに、

ハルケギニア人の半数に祟りをもたらしたのだ……

そしてハルケギニアには神の恵みたる「エリクサーべにふうき」はなかった……

…

ハルケギニアの地獄（後書き）

かつて愚かなメイジがスギとヒノキを召喚してしまったため

ハルケギニアにもたらされた悲劇を書いた掌編でした。

花粉が飛び始めた
地獄の釜の蓋が開いた為、錯乱して書きました。

すみません。

グラン・トロワ改修工事

「どこへ行く！」

一同に背を向けたジョゼフに向かってカステルモールが怒鳴る。

「寝るのだ。いや、そろそろ眠いのでな。」

話なら、明日にしてくれぬか？」

武装した敵勢に囲まれてのこの物言いに、

呆れるカステルモール以下80名余の騎士。

しかしジョゼフは彼らの反応を気にかけて風もなくメイドを呼ぶ。

「ちるみ、ベッドの支度は出来ているか？」

「はいジョゼフ様。こちらへ」

控えていたメイドが現れて答える。

そしてジョゼフを通すために脇に退く。

いや、退くうとして何もないとこで躓いた。

そして大きな飾壺へ盛大に突っ込んで弾き飛ばした。

壺は彫像をなぎ倒し、彫像はより大きな石像を倒す。

石像はグラン・トロワの柱に倒れ掛かり

「今宵はベッドを替えたほうが良さそうだな。」

カステルモール。そなたらも早く逃げたほうが身のためだぞ」

ジョゼフはそう言うと倒れたメイドに歩み寄った。

そしてジョゼフがメイドの腕に手をかけたとき……

不思議なことが起こった。

すっと、ジョゼフとメイドの姿が一瞬で掻き消えたのだ。

「なんだと？」

カステルモールが叫ぶ。

騎士たちが反射的に魔法を放つが調度を破壊しただけで

そこにジョゼフの姿はない。

「な？」ぐらりと床が揺れた。

「団長殿！」隣に控えた副団長のアルヌルフが叫ぶ。

カステルモールがそちらを振り返ると彼の姿が遠ざかっていく。

見ると床石が大きくずれていくではないか。

カステルモールはそこでやっと理解した。

玉座の間が崩壊しつつあることに。

「馬鹿な！ いったいどうやって」

叫ぶカステルモールの目に崩れ落ちてきた巨大な天井石が映った。

グラン・トロワの中から轟音が聞こえてくるのを

ジョゼフはため息をついて見つめていた。

「全く相変わらずだな、ちるみよ」

「いつもいつもすみませんジョゼフ様……」

ジョゼフが虚無の呪文『加速』を覚えた理由は

ちるみの破壊を止める、又は破壊から逃げる為だ。

日常会話を交わす二人に大臣が割って入る。

「修復の手配は整っております。ご命令があればすぐにでも」

大臣はカステルモールの反乱をジョゼフに知らせに来たのだが、

ちるみが入ってきたのを見ると即座に逃げ出して今ここにいる。

「うむ、任せる。カステルモール達は生きていれば拘束せよ。

それから……ベッドを用意しろ。眠くてたまらぬ」

ジョゼフは使い魔の破壊神メイドに背を向けると

欠伸をしながらその場を立ち去った。

その後もジョゼフがエクスプロージョン『爆発』の呪文を覚えることはなかった。

ただし『リコード記録』は既に覚えている。

そして後に炎赤石ルビトに対しても使うことになる。

グラン・トロワ改修工事（後書き）

『スーパーメイドちるみさん』より「香田ちるみ」

（家事が大得意でよく物を壊す）が召喚された掌編でした。

使い魔とデルフと醤油

朝靄について、突っ込んでくるその姿に一番最初に気づいたのは、使い魔の鼻に命じて自前で警戒していた銃兵を指揮する士官だった。

「なに、単独だと？」

敵影がひとつである事に驚き、次いでその速さに驚いた。

人間の動きではない。

士官が正気に戻る前に前方で警戒に当たっていた騎兵は、

その速さに対応を誤り、槍を振るう間もなく次々に落馬する。

その光景に我に返った士官は指揮下の銃兵に弾込めを命じたが、

装填完了より早く目前に現れた敵に側頭部を強打され意識を失う。

次に付近のメイジ達が次々に魔法を放つが、振回す剣に吸込まれる。

隊長は散開を命じた。命じた瞬間、隣に風が吹いた。

その風に杖を切り飛ばされ、次いで胸部に峰打ちを食らう。

肋骨が折れ、痛みに悶絶した隊長は気絶した。

アルビオン軍にとって敵が単騎である事が災いした。

同士討ちを避ける為に銃や投射武器が使えなかったからだ。

敵はそれに付け込んで諸手に構えた武器を縦横無尽に振り回し、アルビオン軍に損害を与えていった。

騎獣のマンティコアを睨けたメイジは騎獣諸共吹き飛ばされる。

槍袈で貫こうとすれば頭上を飛び越えて背後に回られ蹂躪される。

焦った弓兵の士官が掃射を命じるが、敵の速さに掠りもせず、

逆に味方に損害を与え、そこから同士討ちが始まる始末。

前衛の混乱は激しくなっていた。

ホーキンスの下に届いた報告は混乱していた。

曰く、敵は単騎である。

曰く、メイジである。

曰く、八騎から成る騎兵の一隊である。

曰く、エルフの魔法戦士である。

曰く、マインドフレアの群れである。

しかし、ホーキンスは敵は恐らく単騎であろうと中りをつけた。疾きこと風の如く、侵すこと火の如く、知り難きこと陰の如く、動じざること山の如く、動くこと雷霆の如し、だ。

「気に入らないな」 ホーキンスは呟いた。

「我が軍の被害は士官の重傷者14名。兵士の負傷者250名。損害自体は微小です。但し、兵の中にあの様な敵が再び来襲するとの噂が広まっています。

前衛の混乱を収束し統率を回復するには一日を要します」

「我が軍はアレに追撃を阻まれたのか」

副官の報告に顔を顰めたホーキンスの視線の先には、

8本の触腕に巻きつけた剣をブーメランの羽の様にして

回転しながら飛び去る『タコ』の姿があった。

「いや、相棒が八本足なのも初めてなら、空を飛ぶのも初めてだ。

しかも、7万の軍勢を足止めして生還するたあ おでれーた」

デルフリンガーの溜息交じりの言葉に、みずだ子さんは無言だった。

使い魔とデルフと醤油 (後書き)

タコな掌編でした。

ガリア王宮日誌と周辺国動向

ある日のプチ・トロワの一室。

「えーっと。ジョゼフ陛下？」

それから、シャルル閣下？

今俺が置かれている状況を簡潔に説明頂けますか？」

「む？なにか難しいことでもあるのかサイト？」

「これ以上無いほどに解りやすいと思うのだけどね？」

不思議なものを見る目つきの二人に才人は反論する。

「いえ、睡眠薬で眠らされた上、目が覚めたら

四方からイザベラとシャルロットとジョゼットとエルザに

それぞれ手足を掴まれて力づくで引つ張られようとしている。

これのどこがわかりやすいと？」

「サイト争奪戦だが何か？」

「君が中々煮え切らないから

彼女たちに選んでもらおうと思ってね。実力で。

勝った者がサイトの恋人だね」

「いや、なんで大岡裁きの子争いですか!？」

大体、恋人って何です!この子達は妹みたいなもので……

……ぎiiiiiiiiiiやあああああ!……!」

朴念仁の心無い発言に怒れる恋乙女達の折檻が発動する。

「私の純真を何だと思ってるんだい!」

「唐変木……」

「お兄様……いいえサイト酷いわ!」

「ふうん。私のことそんな風に思ってたんだあ……」

水魔法で肉体強化したイザベラに吹っ飛ばされる。

トライアングルスペルでシャルロットに吹っ飛ばされる。

エキスクローション
爆発でジヨゼットに吹っ飛ばされる。

精霊魔法でエルザに吹っ飛ばされる。

「「「「ばかああああああーっっっっ!!!!!!」」」」

「サイトよ。生きているか？」

返事が無いただの屍のようだ。

「ははは。可愛い娘たちを誑かす悪は滅びたようだね」

屈託無く笑うシャルル。

「討伐するはずの吸血鬼にまで手を出した犬には相応しい最期だな」

したり顔でうなづくジョゼフ。

「ところで兄さん。いえ陛下。

トリステインのアンリエッタ女王。

アルビオンのティファニア女王。

ロマリアの聖女ルイズからそれぞれサイトの

引渡し要請がまた来ておりますが？」

「宰相の良き様に処理せよ」

「かしこまりました。いつものようにはぐらかしておきます」

……それにしても、何で皆あんな犬がいいのかなあ」

「さあな。俺にはわからんよ」

ガリア王宮の日常風景であった。

ロマリアからヴィットーリオとジュリオの姿がいつの間にか消え、

大陸浮上問題もエルフとの契約により精霊魔法で

風石の大深度地下掘削が可能となった現在。

王宮で多少馬鹿騒ぎがあるつとハルケギニアの平穩は揺るがなかった。

「アンリエッタ様。寢室に禁制の水の秘薬を用意しないで頂きたい」

「だってサイト殿に味わってもらいたくて」

頬を赤める女王の返事に最近太り始めたマザリーニがため息を吐く。

「陛下。いやテファ。何で部屋に首輪があるんだい？」

「だってサイトを離したくないんだもの。」

それにサイトに良く似合うと思うのよ、姉さん」

右手にルーン刻んだ女官に恥ずかしげに答える女王。

「ルイズ様。特注の鞭と縄が届きました」

「ご苦労様シエスタ。サイトの肌に良く馴染みそうだわ。うふふ」

左手にルーンを刻んだメイドに労いの言葉をかける聖女。

サイトの身の安全はジヨゼフによって守られています。

ガリア王宮日誌と周辺国動向（後書き）

ジョセフがサイト召喚。

親馬鹿シャルルが伝統に喧嘩を売って王位を棒に振る。

ゆるゆる、でもジョゼフ×シャルルは暗躍。

他国ヒロインは一オヤンデレ化。

そんな掌編でした。

アレキサンドル私書録

ある日、気が付いたら目の前に金髪の子供がいた。

名前はエルザ。

吸血鬼であり、俺を屍人鬼ケイルにしたご主人様だ。

「早く付いて来なさい、アレキサンドル！」

BAD ENDから始まる憑依ヒストリーかあ。

あれ、目から汗が出るよ？

さて、俺はもう死んでいる訳だが、少なくとも自分の意思Cogitatioを持って存在Existensしている。

ご主人様エルザに逆らえるかXXXにXXXをしたが問題なく実行できたので間違いない。

おかげで、辛うじて離脱したものの、滅殺されそうになったが。

とにかく原作知識とさっちゃん状態完全自立行動可能なのを生かし死亡フラグを折るべく行動を開始する。

まずエルザがザビエラ村に来てからは村人を殺さないように仕向ける。

ダルシニとアミアス姉妹の様に、人を殺さない吸血鬼なら状況次第で受け入れられる余地があるので、北花壇騎士に潜り込む事を提案したのだ。

当初は人間の配下になることを渋ったエルザだが、

裏側とはいえ身柄の保証が受けられる事にプライド以上に魅力を感じたようだ。

好都合な事に討伐に来たガリアの騎士が風韻竜と蒼髪眼鏡を連れた平賀才人だった。

才人の額にルーン文字が見えたのでジョゼフの使い魔で北花壇騎士をやっている様だ。

才人の甘さに付け込んでエルザを北花壇騎士に売り込めば死亡フラグを折れる筈。

……多分。

その際、俺が屍人鬼^{ゲイル}として存在する事で新たな犠牲者^{ゲイル}が出ないのも利点だ。

……そうあって欲しい。

才人との取引材料は、予め纏めておいたハルケギニアで使える現代

知識と、

『ワールド・ドア世界扉』の情報 - 地球に帰れる希望を与える事。

……釣れるよな？

吸血鬼は死んで灰になり、グール屍人鬼は元から存在しなかった事にしてもらう。

エルザはタバサが両親の親類を知っている事にして連れ出してもらう。

そして俺とおっ母かあは村に居辛いという名目で同行する。

で、結論を言うと、この不安要素満載の生き残り作戦は成功を収める。

よく成功したな。

ジョゼフの興味を惹けたのが勝因とおもわれ。

但し、『ワールド・ドア世界扉』の事で「余計な事を教えるな」と、

才人を手放したくないタバサではないらしいシャルロットとジョゼットとイザベラに抹殺されかけた。

3 股才人モゲロ。

「アレキサンドル。私は下僕である貴方の全面的な協力を求めても良いわね？」

「ご命令を真摯に受け止め、可及的速やか、かつ前向きに検討したいと存じます」

さらにエルザも加えて4股となった。

リア充爆発しろ。

その為余計な事エルザを連れて来たをしたと蒼デコ三人衆にプチトロワの床の頑固な汚れにされかけた。

助かった理由は唯一つ。

「これでサイトを下僕に……」とエルザが漏らしたからだ。

全俺が泣いた。

「ぎいいいいいいいやあああああああ……!……!」

「「「「「ばかあああああああ……!……!」」」」」

そして今日も聞こえる馬鹿騒ぎ。

才人は恩人であるが敢えて言おう。

だめだアイツ早く何とかしないと……

注1 XXXXにXXXX

移動中に盆踊り。死霊の盆踊り。

注2 さっちゃん状態

自由だが別に幸せな訳ではない。

注3 よく成功したな

ご都合主義だが、イジる以外で主役に不都合な話は、

「冷たい方程式」と「過去へ来た男」ぐらいで充分です。

注4 ご命令を真摯に受け止め

やんねーよ、ダリイ。

注5 だめだアイツ

手遅れ

アレキサンドル私書録 (後書き)

シャルル変心で助かった人の掌編でした。

汝の魂に幸いあれ

4歳の時すつ転んで頭を打った拍子に前世の記憶に目覚めた。

帝国暦486年の帝都オーデインノイエ・サンストゥ新無憂宮でのことだ。

父の名はルードヴィッヒ。祖父の名はフリードリヒ。

僕の名前はエルウィン・ヨーゼフ。

5歳でラインハルトに傀儡の皇帝として即位させられる子供だ。

おまけに詩人さんに攫われた挙句最終的に行方不明になる。

どうしよう？

期限は一年。

権限はない。子供だし。

どないせーっちゅうねん。

・・・6年後。

何とかなりました。

いや事態は原作どおり進行したよ？

転生特典とか特別な能力のない子供の事、回りに流されるまま原作のルートを辿り

最終的にはハイネセンで詩人さんの所から逃げ出しました。

相違点は原作と違って中身が一度天寿を全うした人なので、

大人しくして周りに迷惑をかけることが無かったことぐらいか。

ちなみに詩人さんの詩はかなり良かった。

ラインハルトはヘボとか言ってたけど、ビッテンフェルトを

観劇のお供にする人の感性を真に受けてはいけませんね。

それはともかく
閑話休題。

現在俺はアーウィン・ノエルベーカーと名乗っている。

同盟滅亡後、帝国に逆らって投獄、ラインハルトに赦されるも仕事を干されて気落ちしていた公務員のノエルベーカーさんに拾われ養子として育てられたからだ。

迷惑になるだろうから自分が廃帝だとは言っていない。

義父は堅物で融通の利かない不器用な人だったが、

皇族時代には得られなかった普通の家庭的な幸せをくれた。

感謝してもしきれない。

無理して寒い冗句を言っただけは場を盛り下げなければ完璧でした。

そのうち「ヤン提督が植木を植えんリー」でも披露してみようか？

長ずるにつれ俺はルドルフさん並の優れた体格を有するようになった。

実父や祖父があまり頑丈な人でなかったので、

貧弱な坊やになるかと心配したが杞憂だった様だ。

何のことはない、運動不足と不摂生が祟っただけで、

ゴールデンバウム朝500年の血の濁りなど存在しなかった。

先祖でもユリウス帝とその曾孫のカールは90歳を超えていたし、マクシミリアン・ヨーゼフ2世などは体力が暗殺から命を救った。

逆に早逝したオトフリート2世は過労。オトフリート3世は疑心暗鬼による衰弱。

オトフリート4世は「元気すぎ」など、原因がはっきりしてる。

ごく簡単な事だ、それを回避すればいい。

とにかく俺は天分を生かして、帝国軍に入り装甲擲弾兵となる道を選んだ。

義父は微妙な顔をしたが、ここなら政治に巻き込まれることも無く、平和な今、海賊討伐等の治安出動以外には危険も少なからうとの判断からだ。

退役したら警備会社でも興そうかなどと将来設計を描きつつ、

今日も今日とて星系間航路の警備に従事していた。

ついさっきまでは。

気が付け俺は草原の只中にいる。

海賊船の中で無双をやっていたはずなのに。

目の前にはマント姿に杖を持ったピンクブロンドの少女がいる。

横にはシャフトさんやラングさんを彷彿とさせる頭部の人物がいる。

「サモンサーヴァントで平民の兵士を呼び出してどつするの!」

「ちょっと間違えただけよ!」

などというやり取りも聞こえる。

ゼロの使い魔ですかそうですか。

始祖ブリミルだか、大神オーディンだか知らんが

よっぽど俺のことが嫌いらしい。

このままテンプレで物語が進めば

俺はガンダールヴ×リーヴスラシルに成り果てる。

子供のとくと違って力もあり原作知識もあるが、

そうになると今度は原作との乖離が怖い。

俺は所詮一兵士に過ぎず、例えばヤン提督のように

政府が全力を上げて助けに来てくれる見込みはない。

どないせーっちゅうねん。

何か生徒の一人が「Panzer Grenadiere……
・」とか

帝国公用語で言ってるがあいつ転生者か。

抱いてる使い魔の猫も怪しいな。

「golden L?we?」とかやっぱり帝国公用語で言ってる
し。

もう滅茶苦茶だな。

ああ、コルベールと言い合いをしていたルイズが

何か言いながらこちらに近づいてきます。

最期るときは間もなくのようです。

皆さんさようなら、さようなら、さようなら………

汝の魂に幸いあれ（後書き）

運に見放された男が

どうしようもないキャラに転生した挙句

どうにか先の展望が見えかけたところで

ゼロの使い魔にされてしまう掌編でした。

8 / 25 駄洒落追加

9 / 30 体格のくだりを中心に修正

迷える子羊たち

「我が名はアルフレッド。5つの力を司るペンタゴン。

この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

僕は使い魔契約の呪文を唱え軽く口を三毛猫の鼻先に触れる。

すると三毛猫　　つい今し方召喚された使い魔の額にルーンが浮かぶ。

「知恵のルーンアンサズですね。その内に会話できるようになるでしょう。

では、次ですね。ミス・ヴァリエール。こちらに來なさい」

監督役のコルベール教諭は結果を確認すると

次に召喚するピンクブロンドの少女の方に向かう。

ここはトリスティン魔法学院。

現在2年への進級試験である春の使い魔召喚が行われている。

学院の生徒の僕は首尾よく使い魔を呼び出し進級できる運びとなった。

「名前をつけないとな。猫か…何にしよう」

「アルファンだよ」

独り言をしながら考える僕に声がかけられる。

今僕の近くにいるのはコルベール教諭と

召喚を控えガチガチに緊張している少女のみ。

「先生。何か言いましたか？」

「はい？ 何か問題がありましたか？」

コルベール教諭に問いかけるが怪訝そうに振り向くのみ。

隣の少女は自分の世界に没入していて気づいていない。

「名前はアルファンにしてくださいと言ったんだよ。主アルフレッド^{おんじ}」

「「え？」」

呼び出したばかりの使い魔がしゃべっていた。

「君は猫妖精^{ケット・シー}だったのかね」

「違うよ。生まれも育ちもトリスタニアの猫さ」

コルベール教諭の問いを明快に否定する使い魔。

「いや知恵^{アンサズ}が刻まれて話が出るのは早くて数日かかる筈だろ」

「すぐ話せるのは使い魔をやるのが2回目だからだよ。」

ルーンが前と同じだから良く馴染むみたいだね。

アルファンは前の主あまじの時から名乗ってた名前「

疑問に使い魔の猫 - アルファンが答える。

「2回目？使い魔は主あまじと生涯を共にするのではないのかね？」

「あ、いやその……」

「ん？ ああ！無神経なことを言ってしまったようだ。すまなかつたね」

自分の疑問に言葉を濁したアルファンの反応が

前の主あまじを未だ慕っていると思ったのかコルベールは謝罪する。

「いいえ。年甲斐もなく女に入れあげたあのジジイが悪いんですから」

アルファンは神妙な面持ちで答える。

「「……」」

割としょうもなさそうな理由を聞かされて返答に困る僕とコルベール
教諭。

「コルベール先生。召喚を行いたいのですが？」

その沈黙に蚊帳の外になっていた次の番の少女が口を挟む。

「おお待たせてしまった様だね！」

さあミス・ヴァリエール召喚を行いたまえ！」

「やあ、ルイズ！お邪魔したね！さあ、場所を譲るよ！」

渡りに船と僕とコルベール教諭は話題を打ち切る。

「さてアルファン。ちょっと退避しようか」

「なんでさ？」

胸に抱いたアルファンが倉皇とルイズの傍を離れる僕に尋ねる。

周りにいた他の生徒達もルイズから離れ、見物の輪が広がっている。

「それは、」僕が答えようと口を開いた刹那、

轟音と衝撃が僕をなぎ倒し、胸に抱いたアルファンも巻き添えになる。

「よおーくわかったよ……」

薄れ行く意識の中でアルファンの納得の声が耳に届いた。

先に気がついたアルファンに頬をなめられて

正気づくるとルイズとコルベールが口論していた。

ルイズが呼び出した使い魔についてコルベールに抗議しているようだ。

使い魔は人間で ローエングラム朝銀河帝国の装甲擲弾兵だった。

「Panzer Grenadiere……」思わず帝国公用語で呟く。

「golden L?we?」アルファンも首をかしげている。

あれ？こいつ帝国語を喋った？

それと、あの装甲擲弾兵の顔なんか見覚えがあるんだ。

有態にいえば前世旧王朝時代に見飽きたルドルフ大帝像そっくり。

僕なんか厄介事に巻き込まれかけてる？

迷える子羊たち（後書き）

不運な転生者ハルケギニアサイドな掌編でした。

この願いは世界にひとつ

「イタイ！ イタイ！！ イダダダツツ！！！！？？？」

ア、アタマ割れるから！ 離してお願いだから！？」

「わかりました。その願い叶えましょう」

同時に才人の頭を締め付ける力が緩む。

「た、助かった……………」

「それじゃアタシはこれで」

激痛から解放された安堵から地面に座り込む才人に、

彼女はそう告げるとその場から消え去った。

後に残されたのはへたり込む才人と、

一連のやり取りを呆然と見守っていたルイズ。

そして才人達の前に置かれたカップめんの容器だけ。

「今の何だったの一体？」

……………1時間前。

「こ、これはカップめん！何でこんなものが!？」

「かつぷめん？」

「俺の国の保存食だよ！」

魔法学院近くで発見した一つの手提げ袋

コンビニ袋の中から出てきたものを見て驚く才人。

「食べ物なのコレ？何か変な手触りなんだけど」

「ソレは容器を包装してあるだけだよ。食べる部分は中」

早速シエスタに頼んで調理場で湯を沸かしてもらい、

大き目の水差しに入れて部屋まで運んでもらう。

包装を解き蓋を開け湯を注いで待つこと3分。

そして待ちかねた才人が蓋を開けると

「ハロー。私はインスタント食品の精、天子^{てんこ}。」

あなたの願いをなんでもひとつ叶えてあげます」

ぼーん という気の抜けた音と共に何か妙なものが飛び出した。

「え、本当？」

驚くルイズを尻目にいち早く我に返った才人が願い事を言う。

「だったら好物の照り焼きバーガーをたらふく」

いや言いかけるが直ぐに遮られる。

天子様のアイアンクローによって。

「カップめんから現れるアタシインスタント食品の精に対して

敵ハンバーガーを願うとはいいい度胸ね？」

砕けよとばかりに才人の頭をがちり掴んでのたまう天子様てんこ。

そして冒頭に戻る。

「ひ、酷い目にあつた……」

天子様が去り漸くして人心地のついた才人。

そんな彼にルイズが声をかける。

「ねえ。あの、いんすたんと食品の精だけど、

何でも願いを叶えるって言ってたわよね？

だったらアナタ使い魔として

『ご主人様が魔法を使えるように』

とか思わなかったわけ？」

手にはいつの間にか鞭を持っている。

才人の夜はまだ終わっていなかった。

ところ変わって地球は日本。

「いや三千華^{みちか}さんのおかげでコンビニ袋を失くすだけで助かりました」

「異世界への召喚に巻き込まれるなんてとんだ災難でしたわね」

ある自衛隊員がコンビニへ買出しに行った帰りに

乗っていたジープの召喚に巻き込まれたものの

炭酸飲料の精

三千華さんの力で帰還した後そんな会話を交わしたそうなの。

ルイズは才人がさっさと帰還しなかった幸運を噛み締めるべきだった。

が、ルイズはおろか当の才人が気づいていないので、

互いの関係は原作となんら変わる事はなかった。

この願いは世界にひとつ（後書き）

カップめんと天子様がハルケギニアに紛れ込んだ掌編でした。

茶王始末記

ド・モット伯爵家当主は絶望していた。

モット家は水の名門であり歴史はトリスティン建国にまで遡る。

領地は豊かであり貴族の体面を保つのに当たって、

他家のように家計を切り詰める必要はない。

王宮においても代々勅使を拝命しており誉も高い。

跡取り息子は壮健であり魔法の腕も既にスクウェアだ。

領民には法を厳格に適用する一方、他領よりも幾分税を軽くする事で、

畏敬を勝ち取り経営は順調、治安も良い。

そして領内には美しい娘も多い。

ただし当主の領内視察中は何故か若い娘の姿が見られなくなる。

妻は聡明であり閨房でも濃密な団欒を互いに楽しんでいる。

留守中も家事を執事とともに公私にわたり遺漏無く取仕切り、

留守の夫が対応できない夜間のことと独自の裁量で不満を解消する。

仕事に疲れて帰ってきた夫に鬱屈をぶつけず団欒できる女性だ。

モット伯も任務中に交流を広げること余念が無い。特に若い娘と。

これで何が不満なのかと思われる向きもある。

しかしそれでもモット伯は絶望していた。

その原因はハルケギニアとは違う世界 地球にある。

地球の歴史上に馬殿という人物がいる。

「楚の茶王」と揶揄がてら呼ばれた男だ。

その「称号」から知れるとおり無類の茶好きであった。

さて馬殿であるが若い頃は別に茶にこだわることは無かった。

正確には茶を知らなかった。

酒と女に一時の気休めを得る貧しい木工でしかなかった。

茶は馬殷の生きた残唐の世には一部の金持ちのものだった。

それがあある金持ちの依頼を受けた時に茶を振舞われた。

以降の馬殷は茶に捕り憑かれた。

初めて茶を飲んだときには弟に言われた。

「大哥あには茶で酔えるのか。俺は酒の方がいいがなあ」

乱世に生まれた馬殷と弟は賊軍に参加した。

そこで幹部となり親しくなった男にこう語った。

「木工でも家族そろって茶を飲めるようになるといい。そう思う」

茶を腹いっぱい飲むためには熱弁もふるった。

参加した賊軍が根拠地を定めるにあたっては、

もってもらしい理屈を並べ立て茶の産地の湖南に軍を進めさせた。

曲折あり長沙を根拠地に湖南留後（湖南節度使代理）の称号を得た。

「酒より茶を好む変人」というのが自軍の幹部達の共通認識だった。

領土を広げる中「木工上がりの流賊」と罵られることがあった。

激怒して手に持った椀を床に叩きつけたが、

それは注がれたばかりの熱い茶を飲み干してからだった。

楚王を称し朝廷に進物を奉げる時には勿論大量の茶を忘れなかった。

彼の後宮には器量の良い女が百人からいた。

が、一人だけ茶を淹れる技量を買われて側仕えする女までいた。

銘茶品評会を開いて品質を競わせる一方、

当初の理想である庶民が飲むための安い茶も作らせた。

国是は茶業立国。

遂には「楚の茶王」と呼ばれた。

項羽の「楚の霸王」のもじりである。

馬殷は茶王となり乱世の五代十国の楚国二十州を平和に治めた。

ただ後継者に恵まれず楚は実質的に馬殷一代で滅びる。

以上が「茶王」の概略である。

そして早い話モット伯の絶望とは

「茶、が、飲、み、てええええ~~~~~つつ………」

ド・モット伯爵家の当主が転生した馬殷である故にだ。

諸兄も知る通りハルケギニアには茶は無い。

わずかに東方より流れてくる程度である。

「また発作ですかあなた。先週飲まれたばかりでしょうに」

「もう1週間だよ！私は毎日だって飲みたいんだ！！」

呆れる妻に悶えながら喚き返す馬殿改めモット伯。

本人は至って真剣だが傍から見ると正直見苦しい。

モット伯爵家は豊かな財力を持つ。

茶を買う費用ぐらいは軽く捻出できる。

しかし絶対数が足りない。金があっても物が無い。

栽培を試みようにも、そもそも茶の苗木がない。

そして日常的にモット伯の醜態が晒されるのであった。

「また、ですか母上」

「見てはなりませんジュール。染りますからね」

「いつものことです。もう慣れました」

さらりと酷い事をいう妻と子にも気づかずモット伯はのた打ち回る。

ジュールはそんな父親にため息を吐くのであった。

しかし若きジュール・ド・モットには知り様がなかった。

後にトリスタニアでとあるカフェが東方の茶を売り物にする事。

それを隠居していた先代モット伯が聞きつけ、

資金・技術指導の両面からカフェを強力に支援する事。

結果として原作よりも魅惑の妖精亭が苦境に陥いるという未来を。

「うふふ。またモット伯なの……………」

メイドの時といい、今回の件といい……………」

覚えてらっしゃいジュール・ド・モット伯爵閣下……………」

そして父親のせいで余計な誤解と恨みを買ったことを。

茶王始末記（後書き）

モット伯が、「茶王一代記」より転生した父親のせいで

いらんとぼっちりをくっ掌編でした。

アルビオン分割

「城が、城が離れてゆく……」

クロムウエルが呆然と呟く。

アルビオン大陸と切り離されたニューカッスル城が

彼の軍勢から遠ざかってゆくが成す術が無い。

「出鱈目だなオイ」

城壁の上で城が大陸から離れてゆく光景を見て呆れる才人。

「アンタが頼んだんでしょ」突っ込むルイズ。

ウェールズ、ワルドは声も無い。

「おい才人。これでいいのか？」

「あ、お疲れ様です」『さん」

声をかけてくる無精ひげの中年を労う才人。

ニューカッスルがアルビオンと分離した理由。

それは『』が力づくで地面を割ったからである。

「コレで5万対300というのは無し。後は船と竜騎士だけですね」

「あ、ああそうだね」何とか頷くウェールズ。

「いや船も無しにしてやる」

言うなり城壁から危うげなく飛び降りる『J』。

そして大岩を抱えると貴族派の船に投げつける。

風石を直撃したのか失速してゆっくりと地面に落ちる船。

数十回もそれを繰り返すと漸く逃れた数隻を残して艦隊は壊滅した。

「コレで竜騎士だけですな」

「そうだね」ウェールズは他に紡ぐ言葉が無かった。

地球で悪の秘密結社ASKの世界制服を阻止した『J』のヒーロー
パワー。

それは貴族派にとって不条理以外何者でもなかった。

『J』唯一の弱点も「知恵のルーン」アンサスを得て克服されていた。

その後極端に攻撃手段を減らした貴族派は包囲を続けるものの、5万の軍勢が仇となり補給が滞ることになる。

士気は下がり体力的に保たない小貴族から離脱者が出始める。

支払いがなくなった傭兵たちも離脱し貴族派は大きく勢力を減じる。

一方王党派はイーグル号とマリー・ガラント号で補給が可能。

起死回生を狙ってワルドがウェールズ暗殺を試みるも、

ガンダールヴの力を持つ才人と本領を發揮したデルフリンガー、

そして『J』により返り討ちに遭うことになる。

やがて援軍要請を受けたトリスティン空軍が貴族派の背後に現れ貴族派の士気と軍勢は崩壊。アルビオン内戦の勝敗は決した。

「サイト。『J』はどこに行ったの？」

姫様が褒美を与えるとってお呼びなんだけど」

「米を求めて東方に行っちゃったよ」

「は？」

アシサス
知恵のルーンを得ても『J』は『J』だった。

アルピオン分割（後書き）

「ヒーロー警報！」より元ヒーローの「J」（大川次郎）「が
才人に巻き込まれて召喚された掌編でした。

ある日常業務

「君にはゼロの使い魔の世界に転生してもらおう。」

それにあたって好きな能力を与えよう」

私は転生担当の天使。
スルーシ

イレギュラーな運命に遭った魂を導くのが役目だ。

現在は丁度10万人目の転生者の相手をしている。

人数が多い様に思えるが平行世界は無限。コレぐらい些少なものだ。

「え、いいんですか？それじゃあ

まずはズバ抜けた身体能力を下さい。

それから膨大な魔力と高度な精霊魔法を操る素質。

目からは任意でオプティックプラストが出せるようにして。

ハーレムも作りたいからニコポ能力もね。

後はスクウェアクラスの裕福な大貴族

」

ああ、こいつも他の奴らと変わらんなあ。

しょうもない願いばかり並べ立てやがって。

仕事じゃなけりややってられんぜ。

あー早く終わらせて嫁さんとイチャイチャしてえ。

「大貴族の『使い魔の猫』にして下さい」

え？今なんて？

「ぬこですぬこ。ぬこは正義ジャスティスなのです」

本当に猫でいいの？

「生前、私の目はぬこの姿を愛でる為だけに存在し、

私の耳はぬこの鳴き声に聞惚れる為だけに存在し、

私の鼻はぬこをクンカクンカする為だけに存在し、

私の口はぬこを舌を鳴らして呼ぶ為だけに存在し、

私の手はぬこをモフモフと撫でる為だけに存在し、

私の足はぬこを膝の上に座らせる為だけに存在し、

私の体はぬこを肩に攀じ登らせる為だけに存在したのです」

君はどここの枢機卿かね。

「転生の機会を得た今、ぬこ化を願わずしてどうしますかあっ！！」

こいつどうするよオイ。

「ダメ？」

いや簡単なことだけど……。

人外なら竜とか吸血鬼を望んだ奴はいたけどなあ。

「んじゃ宜しくお願いしまっす!!」

ハイハイそう力まんでもいいから。ホイよっと。

あー終わった終わった。

今日の土産はゼロ魔に因んでクックベリーパイだな。

さあ、帰んべ。

その後ハルケギニアで転生ぬこの愛らしさを目撃したものは多い。

だがぬこに籠絡されたのは人が亜人かそれともサハラのエルフか。

そして原作ブレイクしたかどうかは定かではなかった。

ある日常業務（後書き）

ぬこ転生てんしょうゼ口魔編序章な掌編でした。

家の外で発情するぬこ達の声に誘われて書妄想きました。

ある往生

私は天寿を全うし天国にいる。横には2人の女性。

前には懲罰天使ザバーニヤがいて私たちについて来るように命令した。

生前は望んだ事ではないにしても善良ならざる人生を歩んだ私だ。

何らかの罰が下されるのだろう。

懲罰天使ザバーニヤについて行くと一つの部屋に通された。

部屋の中にはなんと一匹のゴブリンがいた。

人間と敵対する亜人だが、

小柄でオークほど強力でなく、

農夫でも棍棒の一つあれば倒せる。

ただ容貌は醜悪で清潔とは程遠い。

すると懲罰天使ザバーニヤが一人の女性に向かって声高に告げる。

「お前は生前の罪の罰として

ゴブリンと100年間この部屋で過ごすのだ！」

あまりの事にショックを受ける女性。

私だってそんな罰は御免だ。もう一人の女性も怖いっている。

しかし懲罰天使ザバーニヤはそんな私たちに構う事無く次の部屋に進む。

そこにいたのは沼スライム。悪臭が鼻をつく。

不定形でヘドロが動き回るような汚らわしい生物だ。

そして懲罰天使ザバーニヤがもう一人の女性に先ほどと同じく声高に告げる。

「お前は生前の罪の罰として

沼スライムと200年間この部屋で過ごすのだ！」

それを聞いてショックで崩れ落ちる女性。

そして最後の私を連れて懲罰天使ザバーニヤは次の部屋に入る。

私はどのような罰を受けるのかと恐々としていると

部屋の中にいたのは小柄な黒髪でのっぺりした顔の冴えない男だった。

サイトをだらしなくすればこんな感じになるかしら？

ただこれまでの部屋で見てきた者達に比べるとあまりに無害に見える。

なぜこの男とこの部屋で過ごすことが私の罰になるのだろうか？

ザバーニヤ
懲罰天使は声高に罰を告げ始めた。

「お前は生前の罪の罰として

アンリエッタと300年間この部屋で過ごすのだ！」

私にではなく男に向かって……。

ある往生（後書き）

罰として扱われる事が罰な掌編でした。

ジョークネタです。権力者を扱き下ろすネタは王族には相性がいいので

「国家機密漏洩罪編」や「私は考えています・嘘発見器編」等を

候補に挙げたのですが短すぎたので少し違いますがこれにしました。

ある超過勤務

「忙しくて堪らん……」

ある官吏がぼやく。

彼の机の前には書類の要塞が彼の攻略を待っていた。

カフェの店主が夜中に戸をたたく音に外に出てみると一人の黒ロ―ブが佇んでいた。

「さあ、来るんだ」黒ロ―ブは陰々滅々とした声で店主に告げる。

「なんだ、アンタか。徴税吏かと思っただぜ。驚かせないでくれ」

カフェの店主は安堵の溜息をつく。

私は徴税吏を勤めるチュレンヌ。

今日の仕事を終えて寛いでいると執事が急な来客を告げた。

「こんな時間に、何者かつ!？」

寛いでいるところを邪魔され、執事に不機嫌を隠さずに訊ねる。

恐縮した執事の返答は最近、売り出し中のカフェの店主だという。なかなか繁盛している様なので、明日にでも『課税の査定』に行こう考えていた店だ。

その店の主が訪ねてきたというので興味が湧き会ってやることにする。

執事には用意をするまで店主をホールに通して待たせておくように命じ、

身支度を整えてホールに赴くと一見して平民とわかる中年男と、

その後ろに全身をフード付きの黒ローブで顔まで隠した正体不明の人物が

立ったまま私を待ち受けていた。

「夜分お寛ぎの所を失礼いたします」

店主はチュレンヌの姿を認めると低頭して挨拶する。

「お前がカフェの店主か。近頃、羽振りがよい様だな。それで用件は何だ」

店主は『羽振りがよい』たつぷり徴税されるというチュレンヌの言葉に

一瞬、情けない顔をするが気を取り直して返答する。

「はい。こちらの方が是非チュレン又様にお会いしたいと。

この方は先刻、私の家においてになられたのですが、

チュレン又様より低い扱いを受けることに納得できぬと申されまして」

この男は今何と言った？ 貴族である私より、あのみすばらしい者が重要と申すか！

「貴様はそんな下らぬ理由で私の休息を妨げたのか！」

怒声に店主は身を竦ませるが、黒ローブは痛痒を感じず佇んでいる。

「私の前で被り物も取らず挨拶もなく何のつもりだ！ 身分を弁えんか！！」

重ねて怒声を上げると、黒ローブが初めて身動きし被ったフードを下ろす。

中から現れたモノを見て私の怒りは驚愕に取って代わられる。

フードの下にあったのは、空洞のはずの眼窩を赤く光らせた髑髏だったからだ。

「なあ、おれお前。このオークの出来損ないが、死神のげら俺より怖い言ゆうんか？」

それに対して店主は申し訳なさそうに死神に答える。

「はい。お迎えは一度だけのことですが、税金は何度でも取られま
すので」

「さて、死神のお迎えという事は貴様は、今日が寿命というのか？」
店主と死神のやり取りを呆然と見ていたが、ふと気づいて尋ねた。

「はい、ご覧のとおり、足がございません」 男が何も無い自分の
足元を指す。

それを見て私は思わず嘆声をあげる。

「何という事だ！ 足がない奴からは金が取れぬではないか！」

「いや、おんらお前らにや。銭ぜにが大事だいじなんは判るけど命には代えられんや
ろ」

死神は呆れた声を出すが、コイツは何も判つとらん。

「何を言う。金がないのは首がないのも同然だ」

躊躇ちゅうちゆいのない返事に死神は溜息を吐くと何処からともなく大鎌を取
り出す。

「ほな、試してみよか」

そして大鎌を振るい私の首を刈取る - 刈取ろうとした。

しかし大鎌は死神と私の間に割り込んだ男によって弾かれる。

「おお、誰だか知らんが、よくやった。褒美を取らずぞ」

「だったら、お前さんを助けた事を内緒にしといてくれ」

そして死神に向き直ると男

スルーシ 告生天使は言った。

「困るんだよ君。このところ唯でさえ転生ミスが頻発して修正に走り回ってるんだ。」

これ以上、予定外の仕事を増やさんでくれ。私はもう10年も家に帰ってないんだ」

スルーシ 告生天使の声は疲労感に溢れていた……。

ある超過勤務（後書き）

ジョークネタ複合の掌編でした。
10万PVありがとうございました。

GO孟獲さん！

3世紀、漢の益州建寧郡。

宙に浮かぶ鏡の様なモノ。

それに一人の男が飲み込まれまいと抵抗している。

彼の名は孟獲。もつかく

西南夷の酋長である。

それを呆然と見守る二人の男。

「なあ奚泥。ケイデイ これはアレか？」

「多分そうだろうね。土安トアン」

「「使い魔召喚の門ゲートだな」」

二人は前世知識持ちの転生者である。

「どうする？ 助けるか？」

「いや無理だろ。それより僕たちも同行しようよ」

「……………そうだな。万一にも孔明にやられたくねえし」

「三国志つても『STOP劉備くん！』だから大丈夫とは思っけど
ね」

この時、彼らの脳裏にあったのは保身である。

三国志演義で二人は孟獲もつかくの援軍として蜀軍と戦い

火攻めで焼き殺される役回りだ。

「向こうのほづが美少女が多いしな」

……………保身だけではないようだ。

「そうそう。こっちは少し江森風味だし」

「兀突骨うつこつこが何か妖しい目で見てくるんだよな」

いや、やはり保身のようだ。

「俺はテンプレでルイズがいいなあ。くぎゅボイス聞きてえ」

「いや土安トアン。ジョゼフに呼ばれてイザベラのデコを愛でるのもいい
よっ」

「奚泥ケイディ。お前さん美中年とキスしたいのか？

だとしたら付き合いを考えんとイカンのだが」

「契約するのは僕らじゃないからね」

「それもそうだな。だったらヴィットーリオでもいいか。嫌がらせで」

孟獲もつかくの容貌は魁夷である。

嘗て孔明ら蜀軍は何度も孟獲を捕らえるが、引見する度に衝撃を受け、

その隙に6度逃走に成功する（＝慣れるのに七回かかる）程である。

「おっと。急がないと門ゲートが閉まるよ」

「おう。それでは行くか」

言うなり二人は孟獲もつかくを門ゲートの方に押し込むように張り付く。

孟獲もつかくが何か怒鳴るが黙殺する。

そして門ゲートは3人を飲み込むと姿を消した。

このジョーカーを引き当てた担い手は誰なのか。

其れを知るものは中原には存在しない。

「おやおや。想定外ですね。しかし向こうさんはお気の毒様です」

いや何故か雑兵Aは知っているようだった。

GO 孟獲さん！（後書き）

『白井版三国志遊戯STOP劉備くん！ どの それはありません
』に

転生した二人が孟獲をダシに新天地を求める掌編でした。

孟獲散

「ねえ。ホンンとおおおにつっアレでちい姉さまの病気が治るの？」

ヴァリエール家一同を代表してルイズが質問する。

その声には不審の念がこれでもかと言つぐらい込められている。

「ルイズ殿。そして皆様。あなた方は私の主あぬの不条理さをご存じない」

「ケイディ奚泥ケイディの申す通り。もつかく孟獲様を良識で判断するのは無駄ですぞ」

不安そうな一同を慰撫するように成功の確信に溢れた笑顔で、

全く安心できないことを語るケイディ奚泥トアンと土安。

今ヴァリエール邸の庭でもつかく孟獲によるカトレアの治療が行われている。

その治療とは篝火を焚いた円陣の中央にカトレアを寝かせ、

その周りをもつかく孟獲が両手で松明を振り翳しながら、

奇声を上げて走り回る行為のことである。

本人曰く「回復の祈祷」らしい。

その効果は蜀軍との戦いで大いに力を発揮したものだが、

初見の人間にソレを信じろというのが無理な代物だ。

実際二人も魏延ぎえんと戦い擬兵の計で重傷を負った鬪習けんしゅうや孟もつたん？が

孟獲もつかくの治療ちりょうによって回復したのを目の当りにしなければ信じなかった。

ルイズの後でヴァリエール公爵は蒼白な顔をしている。

あまりな治療内容に娘が心配であるし、

効果を全く信じていない公爵夫人が最終的に許可を出した公爵に

極地もかくやと言うほどの目線を向けているからだろう。

だからと言うわけではないだろうが、多分、きっと、勿論違っただろうが、

カトレアが全快した時、子煩悩な公爵は誰よりも喜んでいたそう。

ちなみに孟獲もつかくがカトレアと結ばれる事はなかった。

孟獲もつかくは妻の祝融夫人しゅくゆうふじんに事がバレた時に

わが身に降りかかる惨劇をよく理解していたからだ。

例え異世界と言えども油断はならない。

お陰で孟獲はヴァリエール公爵とは良き友人同病相哀れむとなった。

後に奚泥ケイヂイと土安ドアンの好き放題振りが公爵の娘たちにも及んだ時、

公爵夫妻と共に二人を「強く窘めた」のは勿論、主の責任感からである。

孟獲散（後書き）

ルイズに召喚された孟獲^{もつかく}+2 のある一日を書いた掌編でした。

大本は四コマ原作の五丈原のネタですが、ここではちゃんと効果があります。

「今こそ我が秘術見せて進ぜよう。」

フリーズアウト
「停止解凍、全投影連続層写」

呪文を引き金にアルビオン軍前衛に剣が降り注ぐ。

その数は20にすぎず、戦列に均等にばら撒いたため、
運の悪い数人が貫かれたのみで軍勢は止まらない。

しかしそれも土安ドアンが次の呪文を唱えるまで。

ブローケン・ウァンタズム
「壊れた幻想」

その呪文を引き金に20箇所で剣が大爆発を起こした。

大混乱に陥るアルビオン軍前衛。

前進は止まり、後続も停止を余儀なくされる。

「なにが起こった！」事態を把握しようとするホーキンス將軍。

「最前列10箇所以上で魔法によると思われる大規模な爆発が発生！
前衛は被害多数。混乱し進軍不可能の状態であります！

尚、敵は遠方に4名を発見。内一人の呪文詠唱を確認しました！」

上がってきた報告は信じがたいものであった。

「馬鹿な！この距離で攻撃を受けただと！？」

しかも一つの呪文で軍に被害を与えるとは………！」

予想外の伏兵に一瞬絶句する。

「前衛は混乱が収まり次第前進せよと伝えよ！」

後衛は左翼から回りこめ！本軍、中衛は右翼から回り込む！」

だが、ホーキンスはすぐに立ち直ると命令を下す。

敵の殿は僅か4名。

強力なメイジの様だが、所詮万軍を押し留めるのは不可能。

多少陣列が乱れようと、敵本隊は壊走状態。

この場合は拙速でも後方から襲撃すれば十分敵を壊滅できる。

そう判断しての命令であった。

「次はガンドをお見舞いするよ。」

吼ううおおおおおおつ 喝ああああああつ！…！」

しかし奚泥ケイティの雄叫びが響くとそれは覆される。

奚泥ケイティの前に突き出した両掌から

禍々しい光弾が無数に撃ち出され、

先に前衛を迂回した中衛軍に襲い掛かる。

光弾に撃たれた兵は力を失いその場に倒れ伏していく。

ホーキンスも倒れアルビオン軍は指揮系統が崩壊する。

それでも後衛軍の司令は独自の判断で

ホーキンスの指示を実行し続け、

混乱から回復した前衛も進軍を再開する。

「ルイズ。締めはお前さんだ」と土安^{トアン}。

ルイズの精神力は既に孟獲^{もっかく}の回復によって全快している。

「アンタ達どれだけ出鱈目なのよ………爆発^{エクスプロージョン}！」

二人が齎した敵軍の惨状に呆れながらもルイズも呪文を唱える。

それが止めとなりアルビオン軍は壊滅状態となる。

「さてと時間は十分に稼いだ。

敵がいなくなるまで森に避難するのでしょうか」

「どうして？本隊に合流しないの？」

孟獲もっかくの魁夷にも程がある容貌の事を……。

そして大混乱に陥るウエストウッド村。

「どうするのよコレ……」

「どうしたものかな……」

「どうしようもないね」

そんな諦め顔で呟く三人を尻目に

孟獲もっかくは精一杯の笑顔を浮かべて子供をあやそうとする。

「殿。それはなりません」「効果はありませんぞ」

それを見て諫言ツッコミをする土安トアンと奚泥ケイデイの二人を嗜めシハキ倒した後

孟獲もっかくは大木に向かって蹲り「の」の字を書き始めた。

最近ナイーブなお年頃のようにだ。

混乱が収まりティファニア以下の住人を説得をして、

4人が屋根と食事でありつけたのは日も暮れてからの事になる。

7万人を撃退した4人も泣く子には勝てないようだった。

STOPルイズさん！ - 殿はなりません（後書き）

無双をやってみた掌編でした。

ケータイネタにFateと三国志DS3が混ざってます。

あと酒バトンなるものを頂きました。

活動報告もご覧下さい。

出たところはファンタジー -

私の使い魔は丸かった。

「こ、コレが私の使い魔？」

その姿に私は思わず立ち眩みを起こした。

「そ、それが貴女の使い魔？」

か、変わってるわね。

とてもレアじゃない。良かったわね？」

「何で疑問形？ 本気でそう思ってるの？ ねえ？」

私のツツコミにキュルケは目を逸らした。

私の使い魔は強かった。

「僕がこんな不定形の輩に負けるなんて……………」

決闘で鎧袖一触されたギーシュが頂垂れた。

不定形言っな。

私の使い魔は薬草の採取が得意だった。

「アラすごいわ。貴重な草ばかりじゃないの。」

安く売って下さらないかしらミス・ヴァリエール」

採取から帰ってきたらモンモランシーにせがまれた。

何か、目の色が違って少し怖い。

私の使い魔が宝物庫に侵入したフーケを捕まえた。

その後、武装解除を任せたのだけど……………。

「ちよっ、ちよっとアンタ何するんだい!？」

……………ギヤアアア……………ツツツ!!!!!!」

ピチャ ペチャ ミシ ビリ グチャ プチャ ビビ

「い……………や……………あ…………………………」

物陰からフーケの絶叫と名状しがたい音が聞こえてくる。

「うつうつ、あんなことされるなんて……………」

……………まあ、強く生きなさい。

途中で使い魔のグリフォンに拾われたので、

残念ながら「うわらば」は無かった。

「え、何？クックベリーパイもいいけどプリンが食べたいの？」

私の使い魔 - 『教授』は甘いものが好きなようだ。

こらソコ、共食いとかわない。

『教授』は『無口』なので初めの頃は苦労したが、

最近『教授』の『言いたい事』が分るようになった。

ルイズの使い魔は丸かった。

立てば ぶるるん？

座れば ぶりり？

歩く姿は ぶる ぶる ぶる ぶる？

魅惑のぷよぷよラウンドボディをもつ神秘のスーパースライム族。

得意の雷魔法と驚異の身体能力で無双をこなすポーカーフェイス。

その名もゼライスマン教授！！！（ぷよよん？）

専門はキメラ研究です。

「ルイズも変わったわね」

「丸くなった」

「師匠のおかげだね」

「全く残念だよ。もっと罵って欲しかったのに」

後日、同級生の間でそんな会話が交わされたとかなかったとか。

所変わってガリア。

「む。何だこの生物は。丸い毛玉にしか見えんが」

「ヒアー」

「うつつむ。猫だろうか？」

召喚した使い魔の正体に頭を悩ませるジョゼフの姿があった。

「それとも鳴き声からして、あらいぐまラスカ か？」

それは、ながいけ です。

さらに変わってロマリア。

「ナマコ……ですか？」

え、なんですか？名前は『ハナちゃん』と呼んで欲しい？」

古代生物ズッキーニナマコと理解しあうヴィットーリオがいた。

そしてアルビオン。

「羨のなつてない犬にはお仕置が必要だねえ……………」

「1」、誤解だ！コレは不幸な事故なんだ！！」

「へえ、アンタは事故で私の妹の胸を揉むのかい？」

それに私はエロい使い魔とジジイが大嫌いなんだよ！！」

「うわっ！うわああ！！うわらば！！！！」

「ああっサイト!?!」

「いやあ今度の使い手はホント助平だねえ」

「ここは大体、原作どおりだった。」

出たところはファンタジー

-

(後書き)

『出たところファンタジー』よりゼライスマン教授とハナちゃん。

『ポヨポヨ観察日記』より兄貴な日本丸猫ポヨが召喚された掌編でした。

猫の餌係

『ガングレリのルーン
僭主の刻印』

使い魔の能力を他の生き物に託して仮の使い魔とするルーン。

始祖ブリミルが用いたと伝えられるが真実は不明。

恐らく失われた虚無の魔法であると考えられる。

当然ながら現在では言伝えのみで使う者はいない。

(ガリア王立魔法研究所蔵書『ファブリカの書』より)

「つにゃあああ〜〜んう」 スリスリスリ。ぷるぷるぷる。

金髪の女の子が頬を擦りつけると、それに応じるように

弾力性の高いゼライスマン教授のラウンドスライムボディが震える。

「何この子？」 困惑する私の問いかけに教授も答えられない。

私達の周りにはスキルニルはじめ様々な魔法具が散乱している。

先程までシェフィールドと名乗る女に操られ私達を襲っていた物だ。

しかしそれらは唐突に動きを止め、代りに茂みから女の子が現れた。

教授に頬ずりしている子だ。ぷよよん。ドサリ。「うにゃ」

あ、転けた。弾力性の高い教授の体に勢いよく抱き付くから。

でも良く分かるわ。教授の体って柔らかくて気持ちいいし。

でも、あんな風に瞳が潤んで、蕩けた表情なのは何かおかしい。

あれは、まるで泥酔した様子じゃない。ぺろぺろぺろ。

うわあ、今度は教授を舐め始めたわ。

「ちょっとアンタ離れなさい」

襟首を摘んで教授から引き離すと、こちらを向かせる。

「にゅう。にゃにすんのによようう」

呂律の回らない口調で抗議する女の子。

その顔は耳まで真っ赤で額には使い魔のルーンが刻まれている。

「何するのって、それはコッチの科白よ。アンタ誰よ？」

おデコにルーンなんか付け……？」「使い魔のルーン？

「しゅらいむしゃんスライムさん良いにおい……」

小さな体に似合わない力で私の手を振り解くとまた教授に擦寄る。

「アンタまさかガリアの虚無の使い魔？」驚く私に、

「みよずにとにるんだようおじょうちゃん」女の子が応じる。

つて、誰がお嬢ちゃんだコラ、このクソガキ。

「爆発」魔法で吹き飛ばしてやると、

さつき教授が潜んでいた繁みに突っ込む。

大人げないと言っなけれ。

何かと暗躍するガリア王の使い魔と申告したのだ。

気絶する程度に加減もした。文句を言われる筋合いは……

「痛いなあ、本当に何すんのよう」何事もない様に起き上がる。

「……頑丈なのね。目は覚めたかしら？」

「お蔭様で。でもこれ位じゃ私を抑える事なんてできにゃい……。……あるえ？」

呂律がおかしい。また酔っ払った様だ。何なのホントにもう。

「にゃんか、また良いにおい……」今度は繁みの蔦に頬ずりする。

その蔦は鋸葉で葉先が白い。そして葉の裏に白い花が咲いている。

「アレは確か木天蓼？ でも何で酔っ払うの？」

そういえば、あの茂みにいた教授にも匂いが着いているかもしれない。

取り敢ず私は応援に来てくれた銃士の手を借りて、

木天蓼に夢中になっているミヨズニトニルンを縛り上げた。

ガリア、グラントロフの一室。

「うっむ。僭主ガングレリのルーンの刻印にこの様な落とし穴があるとは……」

膝使い魔の上の丸猫を撫でながら呟くガリア王ジョゼフ。

その額にはミヨズニトニルンのルーンがある。

「吸血鬼が昼間動けるようになるのはよかったのだが……」

まさか、木天蓼マタタヒに弱いところまで性質を受け継ぐとはな

「ヒアー」ゴロゴロと嬉しそうに喉を鳴らす球体生物ねじり。

使い勝手が悪いからと代替に吸血鬼エルザを掠ってきたのも無駄になった。

「次は翼人にするか。いやエルフも良いかな。ビダーシャルはどうしている？」

「ヒアー」

「なに？ 今朝方に急用ができたと言って出立した？ ふん、鋭い奴だな……」

ジョゼフは召喚し直すなど思いもよらない様だった。

猫の餌係（後書き）

丸猫の為の掌編でした。

使い魔観察日記

花壇騎士アルヌルフの日記より

某月某日

イザベラ殿下が柱に寄りかかるように蹲って居られたのであわてて駆け寄った。

「邪魔すんじゃないよ！」お言葉と共に良いフックを頂いた。

丸猫の観察中だったご様子。

腫れた頬を擦りながらその場を離れた。

別の日

モリエール夫人が両腕に抱いた丸猫の体に顔を埋めていた。

「ああ、あ~~~~。ジョゼフ様の匂いい~~~~」

最近ジョゼフ陛下に構っていただけなので寂しいようだ。

見なかった事にしてその場を離れた。

さらに別の日

シャルロット殿下の使い魔の風竜が柱の影から爪を噛んで何やら恨めしげに見ている。

視線の先を辿るとシャルロット殿下が柱に寄りかかるように蹲っていた。

声をかけようとして思いとどまる。

最近イザベラ殿下が似たような事をなさっていた。

気配を消して回り込んでみると、案の定、例の丸猫が日向ぼっこしていた。

気づかれないようにそっとその場を離れた。

と、シャルロット殿下を伺う別の人影に気が付いた。

何者かと思ひ背後から忍び寄るとイザベラ殿下だった。

「ハア、ハアツ。丸猫とそれを愛でるエレー又可愛い、エレー又可愛いわあ」

遠くに急用を思いついたのでその場から離れる事にした。

と、さらにイザベラ殿下を伺う人影を発見する。

団長のカステルモール殿だった。

「ああ、イザベラ様のデコ素晴らしい、悶えるデコ様、素敵だ……」

うん、バツソ坊や、ちょっと頭冷やそうか。

体をくねらせる不審者は気絶させて、演習場でたっぷり鍛え直しておいた。

とある安息日

早朝、ジョゼフ陛下が四阿で使い魔を膝に乗せているのを見かけた。その時は何とも思わず通り過ぎたのだが、夕刻近く再び通りかかると、

陛下は朝と代わらぬ姿で使い魔を膝にのせていた。

側仕えに聞くと、猫縛りといって時々あのように固まる事があるという。

最近の宮廷を私は理解できない。

おまけ

○月○日 トリスティン魔法学院

「アンタ達、何してるの？」

「球体は愛おしいものだよ？」

「ぷにぷに……。もふもふ……。甲乙つけがたい」

エルザとタバサが抱きついたゼライスマン教授のラウンドスライムバディから放出される

アンチエイジング物質を堪能する様をルイズは呆れ顔で見やった。

更にある日 ロマリア

「……成程、貴方の言う事は理解できます。」

しかし、これはマギ族の為に必要な事なのです」

ズッキーニナマコの手とハナちゃんと熱く語り合うヴィットーリオを、

ジュリオはスルーして、次にジョゼットの元に訪れる日の事を考えていた。

ついでにアルビオン

「あゝあ？ 何が、ぷにぷにもふもふだって？」

「何でもありません！ マム！！！！」

マチルダはそろそろ才人とジムを何とかしないとイケないようだった。

使い魔観察日記 (後書き)

猫とすれ違った時、電波が飛んできた掌編でした。

まだしばらく休む予定だったので、次回は少し先になります。

100の使い魔

「闇に潜む暗殺者が光の下に姿を現した事が間違いなのだよ。」

さあ、風に引き裂かれるがいいさ」

ワルドの偏在達が呪文を唱える。

いや呪文を唱えようとして崩れ落ち風に溶けて消える。

その跡には何時の間にかアサシン「達」が佇んでいる。

だがワルドと対峙していたアサシン - ザイドはルイズの傍らにいる。

「馬鹿な！偏在だ！？メイジでもない唯の暗殺者が何故！！」

「我々は群にして個。されど個にして群の影。」

アサシンの使い魔「百の貌のハサン」。

どつするワルドよ。

汝は「偏在」とやらで存在を水増し出来る。

しかし生憎だが、数で勝るこちらがこの場では有利だぞ？」

狼狽する唯一残ったワルドにザイドが平坦な声をかける。

それに同調するようにアサシン達が投擲短剣ダークを構える。

その数は30人に増えている。

さらに駄目押しとばかりに胸を貫いた筈のウェールズが起き上がる。

そして変装を解いた黒い姿は白い髑髏の仮面 アサシンだった。

ウェールズ本人は既に決戦の陣頭指揮の準備にかかっている。

「さて後はこの裏切者を塵殺するのみ。

命令をよこせ。マスター 主ルイズよ」

ザイドがルイズを促す。

ルイズは小さく頷いて -

「アサシン。裏切者ワールドを油断なく、躊躇いなく殺しなさい」

- 自らの使い魔サーヴァントに命じた。

「マスター 主ルイズ。お言い付け通りクロムウェルを仕留めました。

貴族派は混乱する筈です。我らは加勢せずとも宜しいのですか？」

報告に来た矮躯のアサシンが問うがルイズは否定する。

「無用よ。これ以上の手助けはアルビオンの為にならないわ。

指揮の統一を欠いた貴族派ぐらい自力で捌けなければ

どの道王党派に先はないわ。

アルビオンの事はアルビオンに任せる。

私たちは使命を果たした。後は脱出するだけよ」

ルイズはその場から立ち去ろうとする。

しかしザイドが突っ込みを入れると足を止める。

「どうやって脱出するのだ。^{マスター}主ルイズ。

船は既に出航し、城は四面楚歌だぞ？」

ルイズは振り向かないので表情は何えないが、

頬に一筋の冷や汗が流れている。

「どうやら考えていなかったようだ。

ザイドは盛大に溜め息を吐いた。

結論としてルイズ達は脱出に成功する。

ギーシュの使い魔のヴェルダンテの掘った抜け穴から城を抜け出し、タバサの使い魔シルフィードに乗ってアルビオンを離れる事になる。ただその中にルイズの爆発を受けてスタボロになった、それは哀れなザイドの姿があったという。

ちなみに他のアサシンは後難を恐れてさっさと霊体化していた。被害に遭うのは受肉して霊体化できないザイドの役割である。

「89番は相変わらず空気が読めん喃」

「あそこは主が部屋を出てからそれとなく声をかけるモンだろ」

「豊臣秀吉のモノマネには定評があるのじゃがなあ」

「フフフ……所詮、奴は我々の中でも一番の小物よ」

本人が気絶しているのを良いことに好き放題を言う他のアサシン達。ルイズをマスターにした89番のアサシン。

幸運のパラメーターは多分 C E++ と思われる。

100の使い魔（後書き）

『Fate/Zero』より『百の貌のハサン』が召喚された掌編でした。

ただし『月の彼方、永遠の眼鏡2』仕様です。

ワンハンドレッド

「うっむ。やはり気が進まん喃。」

「そつだよザイド。我等は暗殺者だ。」

軍勢と正面切って戦うなんて柄じゃない」

ぼやく様に言うアサシン達。

「今更言うな。もう敵は目の前だ。」

それに我等が人間の軍勢に遅れをとるものか。

千の軍勢に匹敵するガンダールヴが1000人。

しかも元が人間の及ばぬ聖杯のサーヴァントだ。

速攻一撃で決めるぞ。覚悟を固めろ。」

今ザイド以下アサシン達はサウスゴードで壊滅したアルビオン侵攻軍が撤退するの為の殿となっている。

「全く何でこんな出来レースをせんといかんだ」

「だから今更言うな。我等が影の暗殺者でなく、

黒衣の無敵部隊と印象付ける必要があるのはわかつとろつが」

貴族の子女が腕利きの暗殺者を多数飼っている。

はつきり言って警戒の対象にしなければならない。

「ええ。あのシェフィールドとか言う女にしてやられたわ」

「先の潜入の際のクロムウエル暗殺が裏目に出たな」

使い魔が腕利きの護衛程度なら問題は無かった。

「まさかクロムウエルの死を公表して

公衆面前でアンドバリの指輪の力で死体を操るとはね」

「始祖の虚無の力の加護を得て復活した

『神の子クロムウエル』の誕生ってわけだ」

「何かマジックアイテム使ったんだろうね。

天から光が差してクロムウエルの死体を包み復活させる。

見てて感動しちまったよ」

これにより貴族派の士気は大いに盛り上がった。

「しかもどこから掴んだのか

我等^{わたし}のことも世間にぶちまけてくれたし」

お陰で『神の子』の軍勢アルビオンと

暗殺者を用いる卑劣なトリステインという構図が出来てしまった。

「あのジョゼフを無能王といったのはどこのどいつだ」

現在ルイズが虚無と認定されており、

ロマリア教皇が支持してくれているが限度はある。

「我等^{わたし}が自らの手で汚名を雪がなくては成らん、か」

「別に汚名では無く事実なんだが 切り捨てられては堪らぬ」

アサシン ハサン達も組織の長であった身だ。

全体を守る為に一部を切り捨てたこともある。

「まあ、そういう事だ。さっさと済ませよう。」

そして今日から我等^{わたし}はトリステインの鴉軍^{あぐん}だ」

ザイドが場を締める。

それに応じてアサシン達は臨戦態勢に入る。

「イスカandalへの意趣返しだな」

「それは『江戸の敵を長崎で討つ』と言う奴じゃないか？」

ちなみにザイドはこの辺りの事情を伝聞でしか知らない。

そして戦いは始まり - 結果は言うまでも無かった。

なお戦後帰還手段がなくウエストウッドの村で世話になっていた

89番^{ザイド}が迎えに来たルイズに心配させたお仕置きとして

爆発^{エクスプロージョン}でスタボロにされたのはまた別のお話。

ついでに子供たちにヒゲダンスを披露していた80番^{カト}と

蕎麦を食べるモノ真似をやっていた34番^{コサン}が

今回は逃げ遅れて巻き添えになった。

ワンハンドレッド（後書き）

ガンダールヴとして召喚されたアサシンの無双が

全く書かれない掌編でした。

おしらせ

10/21 ドラクエもどきを投入しました。

何故「おしらせ」欄をつくって投入の告知をするのかというと、割り込み投稿なので、「新着順検索」にヒットしないからです。

ならば「普通に連載しろ」と仰るかもしれませんが。

それがごもつともな事は重々承知しております。

しかし、元が短編として投入していた程度のもので。

私には通常の連載に持っていく甲斐性がないのです。

其の辺りを理解頂いた上で、お目汚しではありますが、時間つぶしにご笑覧ください。

7/29 少し投入を休みます。

8/26の投入は突発的なものですのでもう少し休みます。

9/21 閑話の「ある雑談」を「渡し場にて」と改題して型月に移しました。

9 / 2 2 1 0 万 P V の お 礼 に 一 話 投 入 し ま し た 。 あ り が と う ご ざ
い ま す 。

更 新 は 不 定 期 に な り ま す 。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3399r/>

ゼロの掌編集

2011年10月21日07時59分発行